The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 9〜11世紀におけるウイグル文字の諸特徴―時代判定への手がかりを求めて― |
| Author(s) | 沖, 美江 |
| Citation | 内陸アジア言語の研究. 1996, 11, p. 15-60 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/16391 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 9～11世紀におけるウイグル文字の諸特徴
## ―― 時代判定への手がかりを求めて ――

沖　美江

[目次]

はじめに
使用資料一覧表
第一章　字形調査の結果より
　第一節　s と š の区別について
　第二節　q / γ / x の区別について
　　(一)　加点の役割とその時代性
　　(二)　語末の q と γ の尻尾の長さによる区別
　第三節　Z への加点について
　第四節　t / d, s / z の交替について
第二章　調査結果の総合的整理とその試用
　第一節　種類別集計の示すもの
　第二節　MOTH に対する Doerfer 見解の再検討
おわりに
文献目録

## はじめに

19世紀末から20世紀初頭にかけて中央アジアより英・独・仏・露・日本等へ将来されたいわゆるウイグル文書の研究は，現在までの約100年間に主として二つの方向から進められてきた．一方は文書の内容を把握し，それを歴史学の史料として役立てようとする立場からの研究であり，もう一方は言語学・文献学的関心に基づいた研究である．

ウイグル文書を含む古トルコ語文献の言語学的特徴による年代的分類に端緒を開いたのは，Gabain 氏の n / y 方言要素による分類であった．氏は古トルコ語文献間に言語差のあることを発見し，それを方言によるものと考えて1938年

にこの分類を発表した[1]．ただしこの段階では，これはあくまで方言による分類であり，時間の流れを意識したものではなかった．しかし後の1962年，Clauson氏によって，これらの言語差を方言ではなく時代の差に由来すると考えるための布石となる仮説が出された[2]．その仮説は1982年庄垣内氏に[3]，83年 Röhrborn氏[4]によって承認され，さらに89年森安氏はこれらの経過をまとめた上でこの時代差説に賛意を表し，誤解を避けるためにn方言・y方言ではなくn言語・y言語と呼び改めている[5]．つまりn言語からy言語へという時代の流れが認められた時点で，Gabain氏により初めて注目されたこれら二つの言語要素に基づく分類法は，年代的分類の手法として利用され得ることになったのである．

一方，1969年 Zieme 氏[6]，79年 Erdal 氏[7]によって，年代的分類のためのさらに細かい指標が発表されたが，これらは音韻論・語形論等の「言語学的特徴」をもとにしている点で，Gabain氏のものと共通していた．

そこへ近年，新しい視点からの試みが始められている．それは「書体」や「字形」に注目することで，文書にある程度の時間的秩序を与えようとするものである．所謂ウイグル文字はソグド文字をその母体とし[8]，突厥第一可汗国期以来の，トルコ人とソグド人の日々の接触の中で自然に生まれてきた[9]．上から意図的に作成・制定されたものではないが故にその発生年代を一点に定めることはもとより不可能であるが，現存する資料の時代性から判断して，この文字の用

---

(1) Gabain 1938, pp.393-395 ; Gabain 1974, pp.3-7.

(2) Clauson 1962, pp.117-118.

(3) 庄垣内 1982, p.52.

(4) Röhrborn 1983, p.295.

(5) 森安 1989a, pp.2-3.

(6) Zieme 1969. 当論文は Zieme 氏の学位論文であり，公表されていないため筆者は参照することができなかった．しかし Röhrborn 氏によれば，内容は Hazai & Zieme 1970 に要約してくり返されているとのことであり，それに従った．また，Doerfer 氏によっても比較的詳しい内容の紹介がなされている．Röhrborn 1983, p.301, n.3 ; Doerfer 1993, pp.18-20.

(7) Erdal 1979, pp.152-159.

(8) 羽田 1958, pp.18-23.

(9) Sims-Williams 1981a, p.359 ; 森安 1985b, pp.39-40.

いられた中心的時代は9世紀後半から14世紀であると考えられている[10]．しかしこの間に書体や幾つかの字形は，明らかに変化を遂げていった．森安氏の諸論文中において活用されている書体の区別とそれによる時代判定[11]，及び語末のq/γ字形と時代性についての研究[12]はいずれもこの点に着目したものであり，また小田氏は88年に八陽経写本中のs/š字形を調べるとともにn/y言語要素とErdal分類要素の抽出を行うことで，写本の段階的変化を例証した[13]．

そしてもう一点，この分野における最新の論著は，93年のDoerfer氏による*Versuch einer linguistischen Datierung älterer osttürkischer Texte*（『古代東トルコ語テキストの言語学的年代決定への試論』）である．Doerfer氏は本書において，先のZieme, Erdal両氏による分類について検討を加えた上に自らの分類指標を発表したが，それらの指標は従来の言語学的特徴のみに留まらず字形にまで拡大されており，字形の変遷をより積極的に時代性と結び付けて考えようとする姿勢が見られる．

以上が古トルコ語文献の年代的分類に関する主な先行研究であるが，中でも字形に注目した研究はまだ始まったばかりと言え，調査対象とされた文字の種類・特徴もわずかなものに限られていた．また，世俗文書には深く立ち入らない傾向が見られ，森安氏の既に指摘しているように，従来挙げられてきた分類指標は相対的に新しいものに対しては利用できない[14]といった問題が残されている．しかし，これらは決して従来の研究者が字形の変遷に関心を払わなかった結果というわけではない．何が古くて何が新しいかという指摘は漠然とではあるが多くの人々によって為され，そして若干の相違はあるもののそれらの意見は大体のところで一致してきた[15]．このテーマに関する研究の少なさは，むしろ

---

(10) 森安 1988, p.51.

(11) 森安 1985a, p.16；森安 1989b, pp.69-72. また，各書体の定義については，森安 1994, pp.66-67 に改めて詳しく述べられている．

(12) 森安 1989a, pp.3-5.

(13) 小田 1988.

(14) 森安 1994, pp.80-81.

(15) これについては第一章において，各字形を取り上げる際に，各々言及する．

この曖昧な「意見の一致」に起因するのかもしれない．

そこで私は，今までその多くが一般的に言われるに留まっていたウイグル文字の字形と時代性についての問題に少しでも確定的要素を提供するため，この度はまずウイグル文書の中でも「古い時代」に属する9～11世紀のものに対象を絞って総合的な字形調査を行うことにした．(16) 同時代に属する文書群の字形に一つのまとまった傾向が存在するなら，それは時代判定への手がかりとなり得る．本稿の最大の目的は，調査結果に基づくデータの提供と同時に，9～11世紀という限られた時間の中で書かれた文字の形に一定の傾向が存在するか否かを明らかにすることであり，また今まで検証されないままに半ば「常識」として定着してきた「古い時代のウイグル文字の特徴」が果たして事実に合致するのかどうかを確かめることである．そして得られたデータを様々な視点から集計することにより各種文書(仏教文献・マニ教文献・世俗文書)間の関係や当時の一般的正字法等についても考察の範囲を広げていきたい．

最後に，使用資料について説明をしておかなければならない．今回の調査では，より正確なデータの収集を期して，従来の研究によりほぼ確実に9～11世紀に属すと認められ，かつ直接写真を見ることができるものに対象を限定した．さらに，出土地域はトゥルファン盆地以東に絞り，(17) マニ教文献・仏教文献・世俗文書の三者の量がなるべく均等になるように配慮している．膨大な量を持つハミ本『弥勒会見記』(Mait/H) は Kolophon のみを調査対象としたのもそのためである．当時の当該地域のウイグルはまだイスラム化しておらず，イスラムの影響はほとんど見られない．使用文書は種類・件数を含めて整理すると次の一覧表のようになる．ただし，Sims-Williams & Hamilton 1990, A ~ H についてはトルコ語で書かれた部分のみを対象とした．

---

(16) 本稿で私が調査対象とした「ウイグル文書」は狭義の文書のみであり，棒杭文書等は含んでいない．

(17) 例外として MOTH 中に，タリム盆地西部のホータンの人によって書かれた文書が含まれている．Nos.16, 18, 21 の3件である．

使用資料一覧表

| 資料集及び論文（略称） | 資　料　名 | 年　代 | 種　類 | 件数 |
|---|---|---|---|---|
| Hamilton 1986 (MOTH) | No. 1 ～ No. 36 | 9世紀, 10世紀 | 仏教<br>マニ教<br>世俗 | 36 |
| Bang & Gabain & Rachmati 1934［図版は MOTH にあり］ | ロンドン本天地八陽神呪経 | 〃 | 仏教 | 1 |
| Sims-Williams & Hamilton 1990 (DTH) | A ~ H | 〃 | 世俗<br>仏教 | 8 |
| Hamilton 1971 | 善悪二王子経 | 10世紀 | 仏教 | 1 |
| Geng Simin & Klimkeit & Einer & Laut 1988 (Mait/H) | Kolophon | 1067 | 〃 | 1 |
| Le Coq 1912-1922 (Manichaica I, II, III) | I: T I α, T II D 173 a, b, d., T II D 177<br>II: T M 419, T II D 169<br>III: T II D 121, T M 423c, T II D 78a | 9世紀, 10世紀 | マニ教 | 9 |
| 森安孝夫 1991b | マニ教寺院経営令則文書<br>M112 v | 9～11世紀初<br>10世紀後半～<br>11世紀初 | 〃 | 2 |
| Hamilton 1990 | Manuscrit 88 | 1003 | 〃 | 1 |
| | | | | 合計<br>59 |

# 第一章　字形調査の結果より

## 第一節　s と š の区別について

s と š は形が大変似ており[18]，ウイグル文書全体を見渡せば確かに区別なく同じ形で書かれていることの方が多い．しかし一方で，両者を明確に別字として書き分けた文書やウイグル文字アルファベット表(T IV Xusup)[19]が存在すること，

(18) 本稿では，特に文字転写 (Transliteration) を示したい場合のみローマ字大文字を使用し，他は小文字に統一する．

(19) Sims-Williams 1981a, p.351.

また š を表す時には右側に二点を付加するという別系統の区別方法を用いたものが存在することも事実である．そこでこれらの相対する事実を前にして，当初は別字であった s（ﾈ）と š（ﾈ）が次第に同化し，今度は š を表す時には二点が付加されるようになったのであろうとの解釈が生まれてきた．このような考え方は古くは Le Coq 氏の著述にうかがえ[20]，後に Clauson 氏に至って，よりはっきりと述べられている[21]．また Tezcan・Zieme 両氏が別字としての区別を古さの現れとみなしているのも[22]，やはり同様の考えが念頭にあったためであろう．しかし皆の意見が一致しているとはいえ，この段階ではまだこの解釈は仮説としか言い得なかった．

そしてこの仮説は1988年，小田氏の「ウイグル文八陽経写本の s / š 字形に関する覚書」に至って初めて，綿密な調査結果に基づいて立証された[23]．調査対象が八陽経の各種写本に限られていたとは言え，ここに「別字→混同→同一字→ š には二点」という流れが確かめられた意義は大きい．また93年には Doerfer 氏によっても，より多様な資料を調査対象として同じ流れが確認されている[24]．

しかし，諸先学によるさらに踏み込んだ指摘の中には，未だ裏付けの得られないままに残されているものもある．それらは，(1)これら二文字の別字としての区別はいつまで保たれたのか，そして(2) š を表すための二点の付加はいつ始まったのか，という二つの問題に集約されよう．

それではまず以下に，今回の s と š の区別についての調査結果（表１）を挙げる．これは，各文書内で s / š 字形が別字として区別されているかどうかに注目した結果である．同一文書中において一貫して両者の区別がされているものには○，区別したりしなかったりという混同が生じているものには△，一貫して区別のないものには×，該当文字の例がない，もしくは例不足により判定不可

(20) Le Coq 1919, p.96.
(21) Clauson 1962, pp.109-110.
(22) Tezcan & Zieme 1971, p.454.
(23) 小田 1988. 特に p.26, 第４表.
(24) Doerfer 1993, pp.94-115. 特に p.111, Tabelle 55.

能なものには□を当てている．そして表1での結果に基づいて，□を除いた判定可能な52件について集計したところ表2のようになった．

これらよりまず読み取ることができるのは9～11世紀という範囲内では別字としての区別を知っている割合がかなり高いということである．これによって

表1

| 資　料 | 種　類 | s/ȘȚ区別 | 資　料 | 種　類 | s/ȘȚ区別 |
|---|---|---|---|---|---|
| MOTH　No. 1 | 仏　教 | × | MOTH　No. 31 | 世　俗 | ○ |
| 2 | 〃 | △ | 32 | 〃 | □ |
| 3 | 〃 | × | 33 | 〃 | × |
| 4 | 〃 | □ | 34 | 〃 | × |
| 5 | マニ教 | ○ | 35 | 〃 | × |
| 6 | 〃 | ○ | 36 | 〃 | × |
| 7 | 〃 | ○ | ロンドン本天地八陽神呪経 | 仏　教 | ○ |
| 8 | 〃 | ○ | DTH　A | 世　俗 | × |
| 9 | 〃 | ○ | B | 〃 | ○ |
| 10 | 〃 | × | C | 仏　教 | □ |
| 11 | 世　俗 | □ | D | 世　俗 | □ |
| 12 | 〃 | □ | E | 〃 | × |
| 13 | 〃 | ○ | F | 〃 | △ |
| 14 | 〃 | ○ | G | 〃 | △ |
| 15 | 〃 | △ | H | 〃 | × |
| 16 | 〃 | ○ | 善悪二王子経 | 仏　教 | ○ |
| 17 | 〃 | □ | Mait / H　Kolophon | 〃 | △ |
| 18 | 〃 | △* | Manichaica I　T 1α | マニ教 | △ |
| 19 | 〃 | ○ | T II D 173a, b, d | 〃 | ○ |
| 20 | 〃 | × | T II D 171 | 〃 | △ |
| 21 | 〃 | × | T II D 177 | 〃 | ○ |
| 22 | 〃 | × | 同 II　T M 419 | 〃 | ○ |
| 23 | 〃 | × | T II D 169 | 〃 | ○ |
| 24 | 〃 | ○ | 同 III　T II D 121 | 〃 | ○ |
| 25 | 〃 | ○ | T M 423c | 〃 | ○ |
| 26 | 〃 | ○ | T II D 78a | 〃 | × |
| 27 | 〃 | ○ | マニ教寺院経営令規文書 | 〃 | ○ |
| 28 | 〃 | ○ | M 112v | 〃 | × |
| 29 | 〃 | × | Manuscrit　88 | 〃 | × |
| 30 | 〃 | × | | | |

＊ 形の上では区別していないが，二点付きのȘ字が一例あり．

表2

| 判定可能　全52件中 | | | 別字という認識のあったもの（○＋△） |
|---|---|---|---|
| | | ○：25件：48.1% | 63.5% |
| | | △：　8件：15.4% | |
| | | ×：19件：36.5% | |
| （内訳） | | | |
| 仏教 | 6点 | ○：　2件：33.3% | 66.6% |
| | | △：　2件：33.3% | |
| | | ×：　2件：33.3% | |
| マニ教 | 18点 | ○：12件：66.7% | 77.8% |
| | | △：　2件：11.1% | |
| | | ×：　4件：22.2% | |
| 世俗 | 28点 | ○：11件：39.3% | 53.6% |
| | | △：　4件：14.3% | |
| | | ×：13件：46.4% | |

先行研究で明らかにされた変遷の初段階が確認されると同時に，この区別を「古い時代」のメルクマールの一つと認めることができよう．そして中でもマニ教文献の几帳面さが目立つが，これについての考察は他の字形の調査結果を待ってからとしたい．

次に，先ほど触れた二つの問題，(1)区別のなくなる時期・(2)š への加点が始まった時期について考えてみよう．まず従来これらの問題についてどの様な指摘が為されてきたのかを見てみると，(1)に関してはTekin氏の，両者の間の別字としての区別は10世紀以後にはほとんど見られないというもの[25]，そしてClauson氏による，この区別は11世紀までになくなったというもの[26]がある．そしてもう一つDoerfer氏の見解はこれらに比してやや複雑である．氏は93年の論著において古トルコ語文献を1a～1d, 2a～2d, 3, 4, 5という11の段階に分類しているが，中でも2b(900～1100年)においてまずトゥルファンで区別のないのが一般的となり，その時敦煌・ハミではまだ両者の区別は守られていたと述べて

(25) Tekin 1980, p.8.
(26) Clauson 1962, p.109.

いる[27]．そしてさらに，両字形に区別を持たない11世紀ヤルカンド文書をもとに，この現象は西方(カラハン朝トルコ語)での書き方の影響によるものであり西から順にトゥルファン，敦煌へとひろがっていったという考えを呈示している[28]．また(1)の問題に関しては，Clauson 氏は区別のなくなるのと同時期に[29]，Doerfer 氏はモンゴル時代から始まったと述べている[30]．

これらの指摘に対して今回の調査結果は何を表しているだろうか．対象資料59件中，おそらく最も新しいと思われる1067年の Maitrisimit ハミ本は，s と š を別字として区別していた．これは Doerfer 氏も認めるところである[31]．ここから言い得ることは11世紀半ば過ぎにも両者の区別を知る人がいたということだけであり，とても(1)の問題に根本的回答を与えることはできない．しかし Tekin, Clauson 両氏の指摘に反して，s / š が別字として区別されているからといってその文書の時代を10世紀以前と判断することは危険であることを示すものと言えよう．一方 Doerfer 氏は先に挙げたように，この1067年の Maitrisimit ハミ本における区別をハミという地域性から解明しようとした．氏の論理は，ハミはトゥルファンの東方，経度的には敦煌とほぼ同等の位置にあるため，まだ西から伝わってきた無区別の影響を受けていないというものである．しかし私はこの考えにも賛成しかねる．今回調査対象とした資料の中にも，×，即ち全く両者が同化してしまっているものはすでに約35％存在し，しかもそれは表1で MOTH から善悪二王子経までにあたる敦煌出土のものにも多数見られた．つまり，氏の述べたように西から区別が消滅していき，2b 段階(900～1100年)にはこの現象はまだ敦煌にまで達していなかったというような事実は認められない．ではなぜ Doerfer 氏はこれ程多くの敦煌における反証例をみすごしたのだろうか．答えは氏が，同氏の91・93年の両著作から明らかなように，MOTH 中

(27) Doerfer 1993, p.111 及び p.112, Tabelle 56.
(28) Doerfer 1993, pp.111-112.
(29) Clauson 1962, pp.109,112.
(30) Doerfer 1993, p.113.
(31) Doerfer 1993, p.99, Tabelle 48.

の大半を9・10世紀のものとは認めていないからである[32]．氏が2bより早い段階に属すとみなした敦煌出土のものはロンドン本天地八陽神呪経と MOTH の Nos.2, 5, 8, 20, 28 のみでありそれらは偶然皆区別が存在した（私は No.20 に区別はないとみなしたが Doerfer 氏も区別ありとするかたわらに「わずかに」という但し書きを付している[33]）．私と Doerfer 氏の結論の相違はここに端を発すると思われるが，MOTH の時代性をどうとらえるかは次章に譲り今は MOTH 中の文書を全て9・10世紀に属すととらえた場合，氏の見解は成り立たないということを指摘しておくだけとしたい．

次に(2)の問題を念頭にもう一度表1を見てみよう．全59件中 ṣ に二点があるのは MOTH の No.18 のみ，しかもその中でも一つの ṣ に対してだけである．ここから少なくとも9～11世紀においてトゥルファン盆地以東に，二点で s から ṣ を区別する習慣はなかったと考えられる．問題はこの一例だけの例外をどう解釈するかである．ここで「はじめに」で述べた地域性の例外を思い出して頂きたい．この No.18 はそのわずかな例外中の一つ，すなわちタリム盆地西部のホータンで書かれた文書である[34]．もちろん，ホータン出身者の手になる他の二つの文書（Nos.16, 21）には加点は見られないこと，No.18 においても四例ある ṣ のうち一例のみであること等から，この例外を直ちに地域性と結び付けて考えることは到底不可能であろう．しかし同じタリム盆地西部で書かれたカーシュガリーのウイグル文字アルファベット表では n に一点，ṣ に二点が付されていること[35]，ヤルカンドの文書でも n に一点，s に三または二点，ṣ に一点を付

(32) Doerfer 1991, pp.175-176 ; Doerfer 1993, p.241.

(33) Doerfer 1993, pp.96-99.

(34) MOTH, p.103.

(35) Dankoff & Kelly 1982, pp.72-74 ; Zieme 1991, p.349. このカーシュガリー著『トルコ・アラビア語総覧』は1072年から数年の間に書かれたものである．しかし我々が目にし得る写本は1266年のものであり（Dankoff & Kelly 1982, p.10），n 及び ṣ の加点も後世のものである可能性は否定できない．またこの写本には14～15世紀に手が加えられていることが明らかにされており（Dankoff & Kelly 1982, pp.10-11），Doerfer, Dankoff 両氏はこれらの加点をその時付されたものとみなしている（Doerfer 1993, p.110）．

した例が存在することを[36]見渡す時，西側には東側と異なる習慣があったのではないかという考えは捨てきれないのであるが，現段階で私にはこれ以上の論及は不可能である．また，私が調査した地域においても，9～11世紀に加点による区別が見られないからといってこれがDoerfer氏の指摘するようにモンゴルの影響下に始まったという証拠にはならない．結局この「ṣに対する加点はいつ始まったのか」という問題については，12世紀以降の文書に対しても調査の必要性を確認したに留っている．

以上のように，今回の調査結果より確実に明らかになるのはやはり9～11世紀のトゥルファン盆地以東の地域では，sとṣはかなりの率で別字として区別されていたということだけのようである．しかしこの，相対的に新しい文書群からは想像もつかない程の区別率の高さは「古い時代」のウイグル文字の一特徴とみなされるには十分なものであろう．ひいてはこのs/ṣの別字としての区別は，確かに文書の時代を考える際の手がかりの一つとなり得ると言えるのである．

## 第二節　q/γ/xの区別について

### (一)　加点の役割とその時代性

文字転写でXと表記されるウイグル文字（[illegible]）は，q/γ/xの三つの発音を表すことが知られている[37]．そしてこのXは，しばしばその左側に加点を伴って（[illegible]）文書中に現れる．ここから，この加点は発音の区別をはっきりさせるための識別記号ではないかという考えが生じたものの，具体的にどの音を表す時に点が付され，どの音を表す時には無点にしておくのかについては未だによく分かっていない．また，この識別法が見られる文書と見られない文書の関係，つまりこの識別法の有無は時代差なのか地域差なのか，それとも普遍的に存在しながらもその使用が書き手の判断に委ねられた一約束事に過ぎなかった

(36) Erdal 1984.

(37) Clauson 1962, p.177. 但しClauson氏は，一般にqとtranscriptionされる音をkで写している．

結果なのかといった問題や，点付きのXで表される音はこの識別法の存在した間じゅう不変であったのか，つまり何に点を付すかというルールそのものが変化することはなかったのかというような問題が相まって，より一層解決を困難にしている．

しかしこの非常な複雑さが興味を引くためか，このXへの加点が持つ意味については今まで実に様々な意見が述べられてきた．その多くは何らかの文書を発表する場において二次的に言及された「アイデア」であり根拠ははっきりしないが，この機会に一度積もりに積もったそれらを整理しておきたい．

まず1962年，Clauson氏が自著 *Turkish and Mongolian Studies* において述べていることを要約すると次のようになる．「かなり早期（11世紀まで）には二点によってq（もしくはx?）をγから区別したが，14世紀までには語中のXと'Nのつながりを区別するために音価にかかわらずXに加点（二点）をおこなう習慣ができた」[38]．そしてこのClauson氏の指摘と同じ内容のことが1991年Zieme氏によっても言われているが，そこでは具体的な時代名が省かれる一方で，「古い書き方」では「複数の」点でqが，そして時々「一つの」点でxがγから区別された，と加点の数と発音の関係についてより細かく述べられている[39]．また，以上両氏の見解の前半部分と一部符合するのがGabain氏の説である．Gabain氏は時代性については全く言及せず，多くの写本は一つもしくは二つの点によってγとqをxから区別しているのに対し，丁寧な写本は大抵二点によってqだけを区別し，γ＝xであると述べている[40]．さらに1994年，吉田氏は，点付きのX文字はγからx/qを区別する場合と，γ/xからqを区別する場合の2種類があったようだとしている[41]．

実は現在ほぼ通説として定着している見解，即ち「当初加点はqをγから区別する，つまり無声音と有声音の区別のためであった」というものは，以上の指

(38) Clauson 1962, pp.109-110.
(39) Zieme 1991, p.350.
(40) Gabain 1974, p.16.
(41) 吉田 1994, p.358.

摘の重複部分と一致する．しかしまたこれらとは若干趣を異にする意見も存在した．Zieme 氏は77年，ある文書が早い時代に属すると考える根拠の一つに，X に対して発音を区別する点が付いていないことを挙げている[42]．またこれはあくまでまだ推定の段階にあるようだが，83年梅村氏は「一点の付された q 字は比較的早期を暗示するものかもしれない」との考えを示した[43]．そして最も新しい，94年の Hamilton 氏と牛氏の論文にみえる「二点は q / γ を x から区別するためのもの」という見解[44]は，再び現在の通説に対立するものとして注目される．

以上のような様々な指摘に対して，初めて実際に文書の字形調査を基に一つの結論を導き出そうとしたのが Doerfer 氏の93年の論著であった[45]．ここで氏が達した結論は，まず q に二点を付して γ と区別していたが，次第に q も γ と同じく無点となり，さらに新しい段階においては今度は q にも γ にも二点が付される一方これらは前段階の無点の q / γ と併存していた，というものである[46]．x の発音は視野に入れられていない．ところがこれは，氏が非常に多くの文書を氏自身の指標によって年代順に分類しグループ分けした後で字形調査を行い，各グループ間の特徴を比較することによって出された結論である．従って第一節においても既に述べたように，もしある文書の年代的分類に誤りがあったならこの結論は成立しない，つまりまだ絶対的結論とは言えないのである．さらに Doerfer 氏はより具体的に，q の無点化の始まりを氏の分類段階での 2c (1000～1209年) に，そして q / γ 両方への加点の始まりを同3 (1248～1330年) とみなして，これを n への加点等と同様にモンゴルの影響下に起こった現象であると述べている[47]．

さて，以上のような諸先学の指摘に対し，私はまずこの度の調査において「X への加点は本当に発音を区別するためにあったのか」という問題から始めること

(42) Zieme 1977, p.156.
(43) 梅村 1983, pp.137-138,152.
(44) Hamilton & Niu 1994, p.158.
(45) Doerfer 1993, pp.94-115.
(46) Doerfer 1993, p.111, Tabelle 55.
(47) Doerfer 1993, p.58, Tabelle 19 及び pp.111-113.

にした．この加点の有無が，例えば単語そのものや単語中でのXの位置(語頭・語中・語末)，Xと前後の文字との関係(母音の前か子音の前か等)などによって規定されているかもしれないという可能性は今まで顧みられないままに議論が進められてきたからである．しかし結論から言えば，この可能性はやはり否定してよい．各文書中の全てのq/γを語頭・語中・語末に分け，それぞれについて無点・一点付き・二点付きの件数を数えたところ，単語中でのXの位置は加点の有無とは無関係であることが分かった．また，単語そのものによって決まっているのでもないことは，例えばMOTH全36件中にašnuqïという単語が無点のqで17回，一点付きで5回，二点付きで19回現れる等の例から明らかであり，Xと前後の文字との関係についても一定の傾向は見出されなかった．そこでまずこのXに対する加点はやはり発音を区別するためのものであることを確かな出発点と認めて，以下に調査結果を見ていく前提としたい．

次に9～11世紀でのXに対する加点の状況を示す**表3**を挙げる．これは，各文書中に現れるXを発音ごとに分けてそれぞれの件数を記し，その内での無点・一点付き・二点付きの件数を%に換算したものである．ここから読み取ることができるのはまず今回調査対象とした資料ではγ/xという発音の際に点を付す例は見られないということである．これは「古い時代」にはγは無点であるという従来の多くの指摘を裏づける．ただここで注意すべきは，森安氏が10世紀頃のものとするベゼクリクのマニ教窟の壁画銘にwxšikがあり，xに加点した例が見られることである(48)．このようにxに二点を付した例は古い時代にも確かに存在したのであるが，今回調査した資料に現われなかったことからわかるように，その使用はきわめて少なかったと判断してよいだろう．

この表はまた，確かに点が付されるのはqを表す場合ではあるが，全体的にはqの場合でも点は付されない傾向が強いことをも明らかにしており，これは従来の指摘とは一致しない．しかしここから直ちに，この時代，この地域では発音がqであろうとγであろうとX字に点を付して区別しようという意識は

(48) 森安 1991b, p.19 & pl.

表3（その1）

| 資　料 | | 種類 | q合計 (件) | うち点なし (%) | 一点付き (%) | 二点付き (%) | γ合計 (件) | うち点なし (%) | 一点付き (%) | 二点付き (%) | その他の発音 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| MOTH | No. 1 | 仏教 | 116 | 60.3 | 7.8 | 31.9 | 80 | 98.8 | 0.0 | 1.2 | x : 11件 点なし 100% |
| | No. 2 | 〃 | 26 | 11.5 | 7.7 | 80.8 | 17 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x : 11件 点なし 100% |
| | No. 3 | 〃 | 67 | 26.9 | 62.7 | 10.4 | 8 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x : 3件 点なし 100% |
| | No. 4 | 〃 | 11 | 45.5 | 0.0 | 54.5 | 5 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x : 5件 点なし 100% |
| | No. 5 | マニ教 | 79 | 53.2 | 7.6 | 39.2 | 34 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x : 15件 点なし 100% |
| | No. 6 | 〃 | 23 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 3 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x : 5件 点なし 100% |
| | No. 7 | 〃 | 4 | 50.0 | 0.0 | 50.0 | 6 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x : 5件, h : 5件 共に点なし 100% |
| | No. 8 | 〃 | 17 | 94.1 | 0.0 | 5.9 | 10 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x : 1件, h : 1件 共に点なし 100% |
| | No. 9 | 〃 | 2 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0 | – | – | – | x : 1件 点なし 100% |
| | No. 10 | 〃 | 2 | 50.0 | 0.0 | 50.0 | 0 | – | – | – | x : 1件 点なし 100% |
| | No. 11 | 世俗 | 7 | 85.7 | 0.0 | 14.3 | 5 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | |
| | No. 12 | 〃 | 3 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 4 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | |
| | No. 13 | 〃 | 7 | 42.9 | 14.2 | 42.9 | 2 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x : 3件 点なし 100% |
| | No. 14 | 〃 | 49 | 87.8 | 6.1 | 6.1 | 10 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x : 2件 点なし 100% |
| | No. 15 | 〃 | 32 | 84.3 | 0.0 | 15.6 | 31 | 96.8 | 0.0 | 3.2 | x : 9件 点なし 100% |
| | No. 16 | 〃 | 12 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 10 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | |
| | No. 17 | 〃 | 14 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 22 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x : 1件 点なし 100% |
| | No. 18 | 〃 | 2 | 50.0 | 0.0 | 50.0 | 11 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x : 1件 点なし 100% |
| | No. 19 | 〃 | 5 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 2 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | |
| | No. 20 | 〃 | 15 | 66.7 | 0.0 | 33.3 | 11 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | |
| | No. 21 | 〃 | 20 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 12 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x : 4件 点なし 100% |
| | No. 22 | 〃 | 20 | 80.0 | 20.0 | 0.0 | 7 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x : 1件 点なし 100% |
| | No. 23 | 〃 | 17 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 6 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x : 1件 点なし 100% |
| | No. 24 | 〃 | 20 | 80.0 | 0.0 | 20.0 | 3 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x : 2件 点なし 100% |
| | No. 25 | 〃 | 13 | 92.3 | 0.0 | 7.7 | 12 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | |
| | No. 26 | 〃 | 11 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 2 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x : 1件 点なし 100% |
| | No. 27 | 〃 | 4 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 4 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x : 1件 点なし 100% |
| | No. 28 | 〃 | 23 | 91.3 | 0.0 | 8.7 | 14 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | |
| | No. 29 | 〃 | 35 | 91.4 | 5.7 | 2.9 | 11 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | |
| | No. 30 | 〃 | 10 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 11 | 90.9 | 9.1 | 0.0 | |

表3（その2）

| 資　料 | | 種類 | q合計 (件) | ち点なし (%) | 一点付き (%) | 二点付き (%) | γ合計 (件) | ち点なし (%) | 一点付き (%) | 二点付き (%) | その他の発音 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| MOTH | No. 31 | 世俗 | 5 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 2 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x: 1件 点なし 100% |
| | No. 32 | 〃 | 5 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 1 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | |
| | No. 33 | 〃 | 4 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 1 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | |
| | No. 34 | 〃 | 66 | 75.8 | 21.2 | 3.0 | 24 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x: 1件 点なし 100% |
| | No. 35 | 〃 | 13 | 69.2 | 30.8 | 0.0 | 5 | 60.0 | 40.0 | 0.0 | |
| | No. 36 | 〃 | 25 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 4 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | |
| ロンドン本天地八陽神呪経 | | 仏教 | 931 | 11.6 | 0.2 | 88.2 | 566 | 97.5 | 0.0 | 2.5 | x: 2件 点なし 100% |
| DTH | A | 世俗 | 18 | 77.8 | 16.7 | 5.6 | 4 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | |
| | B | 〃 | 0 | – | – | – | 0 | – | – | – | |
| | C | 仏教 | 0 | – | – | – | 0 | – | – | – | |
| | D | 世俗 | 0 | – | – | – | 0 | – | – | – | |
| | E | 〃 | 1 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 3 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | |
| | F | 〃 | 2 | 50.0 | 0.0 | 50.0 | 1 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | |
| | G | 〃 | 13 | 92.3 | 0.0 | 7.7 | 2 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | |
| | H | 〃 | 2 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0 | – | – | – | |
| 善悪二王子経 | | 仏教 | 468 | 49.4 | 0.4 | 50.2 | 258 | 99.6 | 0.4 | 0.0 | x: 12件 点なし 100% |
| Mait / H Kolophon | | 〃 | 43 | 32.6 | 0.0 | 67.4 | 24 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x: 4件 点なし 100% |
| Manichaica I | TIα | マニ教 | 7 | 0.0 | 0.0 | 100.0 | 5 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x: 5件 点なし 100% |
| | TIID 173a, b, d | 〃 | 85 | 0.0 | 0.0 | 100.0 | 67 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x: 18件 点なし 100% |
| | TIID 171 | 〃 | 49 | 2.0 | 0.0 | 98.0 | 40 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x: 11件 点なし 100% |
| | TIID 177 | 〃 | 40 | 2.5 | 0.0 | 97.5 | 20 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x: 2件 点なし 100% |
| 同II | TM 419 | 〃 | 13 | 7.7 | 0.0 | 92.3 | 8 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x: 1件 点なし 100% |
| | TIID 169 | 〃 | 36 | 0.0 | 0.0 | 100.0 | 26 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 同III | TIID 121 | 〃 | 9 | 80.0 | 0.0 | 77.8 | 6 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | |
| | TM 423c | 〃 | 13 | 92.3 | 15.4 | 84.6 | 6 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x: 1件 点なし 100% |
| | TIID 78a | 〃 | 12 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 18 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | |
| マニ教寺院経営令規文書 | | 〃 | 150 | 100.0 | 0.7 | 0.0 | 106 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x: 27件 点なし 100% |
| M 112v | | 〃 | 21 | 91.3 | 0.0 | 0.0 | 24 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x: 5件 点なし 100% |
| Manuscrit | 88 | 〃 | 33 | 91.4 | 0.0 | 57.6 | 36 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | x: 21件, h: 1件 共に点なし 100% |

薄かったと判断し，Zieme 氏が一度だけ示した77年の，区別のための点がないのは早い時代を示すという指摘を承認してよいだろうか．さらに表3をよく観察すると，q に二点の付く率が宗教関係文書で高く，世俗文書とは対照的であること，なかでも MOTH No.2，天地八陽神呪経，Manichaica ではほぼ一貫して q を表す際には二点が付されていることに気付く．Hamilton 氏によればこの MOTH No.2 は無量寿経の一部である．(49) 私はこれらの文書と他の文書との相違は，書き手が書くことを職業とする人物であった否か，つまりその文書がそれを書くことで書き手に何らかの報酬をもたらすものであったかどうかを反映していると考えたい．Laut 氏がウイグル文字写本中の誤りと訂正方法について論じた中で述べているように，「文字に対する知識に関わらず，目立つ修正はそれ自体が識別され，そのような場合きっと謝礼の削減が為されたと考え得る」なら，同様にその有無が一目瞭然の加点についても注意が払われたとは考えられないだろうか．もちろん宗教的動機も関係していたであろう．(50)

今回調査した資料に関する限り，γ / x の音を表す場合には加点がなされた例がなかった一方，q を表す場合については俗文書では無点の傾向が非常に強いが，宗教関係文書とりわけ経典類では逆に二点が付される傾向が強い，と分けて考えるべきことが判明した．つまり従来の指摘に最も多く，かつ現在通説化している「加点は q を γ / x から区別するためのもの」という意見も，文書の性格を考えずには言うことができないのである．また Doerfer 氏が変遷の初段階を q̈ ≠ γ と結論づけたのも，氏が9・10世紀における資料として用いたものがマニ教文献に偏っていたことに起因すると思われ，(51) そしてそれは氏が多くの世

(49) Hamilton 1986, p.21 ; Erdal 1988, p.252.

(50) Laut 1992, p.136. また Laut 氏は，写本には「寄進者の委任によって作られたもの」と「僧院内部での僧の活動のためのもの」があるとし，後者は大抵実に誤りが多く，かつ目立たないよう修正しようという意図が薄いと述べている．表3の善悪二王子経は非常に多くの誤りと修正を持ち，q に対する点の付し方も中途半端であるが，もしかしたらそれはこの理由で説明がつくのかもしれない．但し Laut 氏は後者のタイプの写本は後期になって現れるとしており，その点ではこの善悪二王子経は当てはまらない(Laut 1992, p.141)．

俗文書を含む敦煌出土文書を9・10世紀のものとは認めないという，前節で指摘した問題とつながっている．qへの加点によるγ/xとの区別は，世俗文書を除くという条件付きでの当時の特徴と言え，そしてこの加点に対する姿勢の差異が書き手の立場によるということはまた，当地域でのウイグル文字使用がどのような人々の間から始まったのかを考える糸口ともなり得るが，これについては次章で詳述することとしたい．

既に述べたように今回の調査は9～11世紀を対象としたものであり，それ故先学の指摘中の後期における現象については検証することはできなかった．ただ，この「古い時代」には'N（又はN'）を含む単語と含まない単語でXへの加点に差はなく，X対'Nの図式はまだ存在しなかったということは確かめられる．また一点付きのqは全資料59件中14件に現れるが，その多くが二点付きのqとの併存であること，一点とは言っても長い線のような例がしばしば見られることから，一点は早い時代を示すと言うよりも二点と同質のものであったのではないかとの推測もできる．しかしこれについては，MOTH Nos.22, 35や梅村氏の挙げた，庄垣内氏によって紹介された仏説天地八陽神呪経の一断片及び数点のマニ教文献など，一貫して一点付きのqしか見られない文書も存在する(52)ことから，確かにまだソグド文字との関係等を含めてさらなる検討が必要であろう．

最後に純粋な字形の問題ではないが，今回の調査を通して現れてきた一つの疑問をここに呈示しておきたい．それは支配者の称号であるqan/xanという言葉の発音に関してである．この単語がqかxかどちらの音で発音されていたのかは未だに明確でなく，そのために転写に際してもq/xいずれを用いるかは人によってまちまちであった．ところが今回の調査ではこの単語中のXは常に無

(51) Doerfer 1993, p.111, Tabelle 55及びpp.96-100. 私は，基本的にはDoerfer氏がTabelle 55によって示す流れそのものは承認する立場であって，決して否定はしない．ただ，氏の言うAlte Epoche, Mittlere Epoche間の変化は，既にAlte Epoche内でも文書の種類によっては起こっていたのであり，qの無点化の始まる時期については氏の見解に賛成しない．

(52) 梅村 1983, pp.137-138；庄垣内 1979, p.07.

点でしか現れなかったのである．例えばMOTH全36件中，この単語は18回現れるが全て無点であり，またロンドン本天地八陽神呪経にはこの単語とbur, 即ち「仏」とが混ざってできたburqan / burxanが79回現れるが[53]，その内78回は無点であった．**表3**から分かるように，天地八陽神呪経はかなり几帳面にqには二点を付しており，一方xはどの文書においても100%無点である．ここからこのqan / xanという単語は当時の人々にはxの音と認識されていたのではないかという考えが出てくる[54]．しかしもしそうであれば，xの音は純粋のウイグル語ではなく外来語や漢語における摩擦音を表すと言われている[55]ために，このqan / xanという単語はどこから来たのだろうかという疑問が生じるのである．いずれにせよ，9～11世紀においてこの単語が常に無点で現れるという事実は，この単語の発音及び起源の解明に何らかの寄与をなすかもしれない．

### (二) 語末の -q と -γ の尻尾の長さによる区別

1975年Sims-Williams氏は，ウイグル文字の母体となったソグド文字草書体では，Xが語末に位置する場合，それがx / γのいずれの音を表すかは尻尾の長短によって区別されている，ということを明らかにした．氏によれば-xは長く水平もしくは垂直な尻尾を持ちそれに対して-γは下向きの未発達な尻尾しか持たない[56]．そして，この区別が古くはウイグル文字Xにおいても存在したこと，即ち-qは尻尾を長く-γは短く書かれていた[57]ということが1989年森安氏によって確かめられた．森安氏は，小田壽典氏によって編年的に分類されている天地八陽神呪経の写本・版本を用いて，当初は存在したこの区別が時代とともに消滅していくことを，またさらに多くの文献を調査することによって「①マニ教文

(53) Clauson 1972, p.360.

(54) Clauson氏はこの単語の発音はxの方であったろうと述べており，今回の調査結果はこれに一致する (Clauson 1972, pp.611,630).

(55) Clauson 1972, p.ix ; 松川 1995, p.112.

(56) Sims-Williams 1975, p.132 ; Sims-Williams 1981b, p.194. 但しSims-Williams氏はこの文字を横書きと見ているため，氏の言う「水平もしくは垂直な尻尾を持つ」xとは縦書きに直せば と であり，「下向きの未発達な尻尾を持つ」γは となる．

(57) ソグド文字でのxはウイグル文字ではqに対応する (Sims-Williams 1981a, p.355).

献には基本的にこの区別がある．②仏教文献には基本的にこの区別がない．③俗文書(元代のものだけでなく，10世紀前後の敦煌蔵経洞出土のものも含む)にも基本的にこの区別はない」ことを明らかにしている．(58)

次に挙げる**表4**は，各文書中の語末のq/γを尻尾の長さによって分類し，さらにその中で加点の数ごとに件数を示したものであるが，(59) ここから読み取ることができるのはマニ教関係文書での区別率の高さと俗文書のいい加減さであり，これによってまず先に挙げた森安氏の調査結果が再度確認されたと言えよう．さらに，全体を大きく眺めてみるとqは尻尾の長いものとあいまいなものに，逆にγはあいまいなものと短いものに偏っており，まるで両方あいまいで区別しないのはかまわないが尻尾の短いq, 長いγはいけないという認識があったかのようである．また，(一) に挙げた**表3**と，この**表4**とを対照してみると，天地八陽神呪経及びManichaicaでは加点によるqの区別，尻尾の長さによるq/γの区別がともによく守られている一方，その両方ともがいい加減な善悪二王子経や，qは一貫して付点により区別するが尻尾の長さには全く注意を払わないManichaica III, TM 423cのような例，また逆に加点は一切行わないが尻尾の長短による区別には几帳面なマニ教寺院経営令規文書など，様々なタイプのものが併存していることが分かる．従ってここからまた，加点の有無によるq/γの区別と，尻尾の長短によるそれらの区別はそれぞれ関係を持たない独立した存在であることが認められよう．つまり両者の間に，尻尾の長さによる区別をしないかわりに加点による区別が顕著であるとか，その逆といった補完関係は見られない．

以上のようにq/γの尻尾の長さによる区別は確かに存在し，特にマニ教文献においては「古い時代」のメルクマールの一つとして利用できることが分かっ

(58) 森安 1989a, pp.3-4. 但し，③については，対象を「半楷書体」の俗文書に限れば確かに区別は消滅する傾向にあるものの，まれには区別を保持しているものがあることも，既に同氏によって確かめられている (森安 1991a, pp.48-50).

(59) 数字のばらつきの中には，語末という位置のために受ける若干の制約 (例えば，行末でスペースが足りない，又は余ったために埋め草がわりにされるなど) によるものも含まれていることは考慮に入れる必要がある．

表4（その1）

| 資　料 | | 種類 | 尻尾長い | | | 尻尾あいまい | | | 尻尾短い | | | 尻尾長い | | | 尻尾あいまい | | | 尻尾短い | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | −q | −q̇ | −q̈ | −q | −q̇ | −q̈ | −q | −q̇ | −q̈ | −γ | −γ̇ | −γ̈ | −γ | −γ̇ | −γ̈ | −γ | −γ̇ | −γ̈ |
| MOTH | No. 1 | 仏教 | 5 | | 1 | | | | 7 | | | | | | | | | 54 | | |
| | No. 2 | 〃 | | | | | | 1 | | | 2 | | | | | | | 11 | | |
| | No. 3 | 〃 | | | | 2 | 24 | 2 | | | | | | | 3 | | | | | |
| | No. 4 | 〃 | | | | | | 1 | | | 1 | | | | | | | 5 | | |
| | No. 5 | マニ教 | 10 | 2 | 5 | | | | | | | | | | 1 | | | 17 | | |
| | No. 6 | 〃 | 3 | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | |
| | No. 7 | 〃 | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | | | | | |
| | No. 8 | 〃 | 9 | | | | | | | | | | | | 3 | | | | | |
| | No. 9 | 〃 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | |
| | No. 10 | 〃 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | No. 11 | 世俗 | | | | | | | 2 | | 1 | | | | | | | 1 | | |
| | No. 12 | 〃 | | | | 1 | | | | | | | | | 2 | | | | | |
| | No. 13 | 〃 | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | | | | | |
| | No. 14 | 〃 | 1 | 1 | | | 1 | | | | | | | | 3 | | | 2 | | |
| | No. 15 | 〃 | 4 | | 3 | 1 | | | | | | | | 1 | 2 | | | 8 | | |
| | No. 16 | 〃 | 2 | | | | | | | | | 5 | | | | | | | | |
| | No. 17 | 〃 | | | | 2 | | | | | | 1 | | | | | | | | |
| | No. 18 | 〃 | | | | | | | | | | | | | 4 | | | | | |
| | No. 19 | 〃 | | | | 1 | | | | | | | | | 1 | | | | | |
| | No. 20 | 〃 | | | 1 | | | | 3 | | | | | | | | | 8 | | |
| | No. 21 | 〃 | | | | 3 | | | | | | | | | 5 | | | 1 | | |
| | No. 22 | 〃 | | | | 3 | | | 2 | | | | | | 4 | | | | | |
| | No. 23 | 〃 | 2 | | | | | | | | | 1 | | | 3 | | | | | |
| | No. 24 | 〃 | 1 | | | 1 | | | | | | | | | 2 | | | | | |
| | No. 25 | 〃 | 1 | | | | | | | | | | | | 2 | | | 4 | | |
| | No. 26 | 〃 | | | | 1 | | | | | | | | | 1 | | | | | |
| | No. 27 | 〃 | 2 | | | | | | | | | | | | 1 | | | 1 | | |
| | No. 28 | 〃 | 1 | | 1 | | | | 1 | | | | | | 4 | | | 1 | | |
| | No. 29 | 〃 | 2 | | | 4 | | | | | | | | | 4 | | | 3 | | |
| | No. 30 | 〃 | 2 | | | | | | | | | 4 | 1 | | | | | | | |

［空欄は該当件数０を示す］

表4（その2）

| 資　料 | 種類 | 尻尾長い | | | 尻尾あいまい | | | 尻尾短い | | | 尻尾長い | | | 尻尾あいまい | | | 尻尾短い | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | −q | −q̇ | −q̈ | −q | −q̇ | −q̈ | −q | −q̇ | −q̈ | −γ | −γ̇ | −γ̈ | −γ | −γ̇ | −γ̈ | −γ | −γ̇ | −γ̈ |
| MOTH　No. 31 | 世俗 | 3 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | |
| No. 32 | 〃 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| No. 33 | 〃 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| No. 34 | 〃 | 1 | | | 2 | 1 | | | | | | | | 12 | | | | | |
| No. 35 | 〃 | | | | | | | | 1 | | | | | 1 | | | 2 | 1 | |
| No. 36 | 〃 | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | |
| ロンドン本天地八陽神呪経 | 仏教 | 1 | | 115 | | | | 3 | | 49 | 4 | | 3 | | | | 260 | | |
| DTH　A | 世俗 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| B | 〃 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| C | 仏教 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| D | 世俗 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| E | 〃 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | 2 | | |
| F | 〃 | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | | | | | |
| G | 〃 | | | | 1 | | | | | | | | | 1 | | | 2 | | |
| H | 〃 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 善悪二王子経 | 仏教 | 3 | 1 | 6 | 11 | | 21 | 6 | | 1 | 6 | | | 50 | | | 59 | | |
| Mait / H Kolophon | 〃 | | | 1 | | | | | | | | | | 17 | | | 3 | | |
| Manichaica I　T I α | マニ教 | | | 2 | | | | | | | | | | | | | 2 | | |
| T II D 173a, b, d | 〃 | | | 9 | | | | | | | | | | | | | 23 | | |
| T II D 171 | 〃 | | | 10 | | | 1 | | | | 15 | | | 1 | | | 1 | | |
| T II D 177 | 〃 | 1 | | 7 | | | | | | | | | | | | | 6 | | |
| 同 II　T M 419 | 〃 | 1 | | 2 | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | | |
| T II D 169 | 〃 | | | | | | | | | 5 | 5 | | | | | | 13 | | |
| 同 III　T II D 121 | 〃 | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | | |
| T M 423c | 〃 | | | 1 | | | 1 | | 2 | 2 | | | | 1 | | | 2 | | |
| T II D 78a | 〃 | 1 | | | | | | | | | 1 | | | 6 | | | 2 | | |
| マニ教寺院経営令規文書 | 〃 | 17 | | | | | | 1 | | | | | | | | | 33 | | |
| M 112v | 〃 | 7 | | | | | | | | | | | | | | | 19 | | |
| Manuscrit　88 | 〃 | | | 1 | | | | | | | | | | 17 | | | 3 | | |

［空欄は該当件数０を示す］

た．しかし，その他の種類の文書にこの特徴が見られる頻度は第一節に取り上げたs/šの区別等に比べてかなり低い．従って文書の時代を考える手がかりとしては利用範囲が限られていることもまた事実であると言えよう．(60)

## 第三節　Zへの加点について

Zは特殊な文字である．というのも，この文字は常に次の文字にはつながらず分かち書きされるからである．また，時々はその右側に一つもしくは二つの点を伴って現れる．これらの現象は既にソグド文字においても見られるが，その役割の解釈について問題がないわけではない．Clauson氏は，500年頃より発達したいわゆる「スートラ体」においてはNとの区別のためにZに点を付したが，7世紀頃より見られる「草書体」ではZは分かち書きによってNと区別される一方，加点はzに対してžの音を表すようになったと述べている．(61) これに対し，Sims-Williams氏は時代性については全く言及せず，ある文書では加点(一つ又は二つ)はžを表すために，またあるものではZ(zとž両方)をNから区別するために用いられているとだけ指摘した．(62)

本稿で私が問題にしているのはウイグル文字であってソグド文字ではない．それにもかかわらず今ソグド文字内での問題点を紹介したのは，実はこれがそのままウイグル文字内でのZが持つ問題でもあるからである．つまり焦点はやはり「Zへの加点はNとの区別のためなのか，それともzとžの発音の区別のためなのか」というところにある．このウイグル文字Zへの加点の意味については，Le Coq氏を始めGabain, Clauson氏ら先学の多くが，後者のため，即ち借用語中のžを示すためとみなしてきた．(63) ただErdal氏はヤルカンド出土文書中の二点の付いたzの例を，語末のNとの区別のためと解釈している．(64)

---

(60)また，この尻尾の長さによる区別の有無が，相対的に新しい文書群の年代的分類には役立てられないことは，既に森安氏によって指摘されている(森安 1994, pp.80-81)．

(61) Clauson 1962, pp.102-103. ここで氏がjで表している音は，他の先学によりžと表記されている音と同じものを指している(Clauson 1962, p.105表)．

(62) Sims-Williams 1981a, p.348, n.5.

(63) Le Coq 1919, p.96 ; Gabain 1948, p.15 ; Clauson 1962, p.112.

それでは9～11世紀におけるZの状況はどうであろうか．表5は全文書中のZをzとẓに分け，さらに点の数ごとに件数を調べたものである．これらのZは全て分かち書きされていた．つまりこれは，「分かち書き」こそZがZたる

表5

| 資　料 | 種類 | z | ẓ | z̤ | ž | ẓ̌ | ž̤ | 資　料 | 種類 | z | ẓ | z̤ | ž | ẓ̌ | ž̤ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| MOTH No. 1 | 仏教 | 78 | | 2 | 4 | | 6 | MOTH No. 31 | 世俗 | 4 | | | | | |
| 2 | 〃 | 18 | | | | | | 32 | 〃 | 4 | | | | | |
| 3 | 〃 | 10 | 1 | | | 2 | 2 | 33 | 〃 | | | | | | |
| 4 | 〃 | 8 | | | | | | 34 | 〃 | 5 | | | | | |
| 5 | マニ教 | 45 | | | | | | 35 | 〃 | 6 | | | | | |
| 6 | 〃 | 5 | | | | | | 36 | 〃 | | 2 | 5 | | | |
| 7 | 〃 | 5 | | | | | | ロンドン本天地八陽神呪経 | 仏教 | 452 | | | 1 | | 9 |
| 8 | 〃 | 9 | | | | | | DTH A | 世俗 | 21 | | | | | |
| 9 | 〃 | 3 | | | | | | B | 〃 | | | | | | |
| 10 | 〃 | 1 | | | | | | C | 仏教 | | | 4 | | | |
| 11 | 世俗 | 6 | | | | | | D | 世俗 | | | | | | |
| 12 | 〃 | 3 | | | | | | E | 〃 | 9 | 1 | 4 | | | |
| 13 | 〃 | 4 | | | | | | F | 〃 | 1 | 9 | 3 | | | |
| 14 | 〃 | 19 | 1 | | | | | G | 〃 | 7 | | | | | |
| 15 | 〃 | 20 | | | | | | H | 〃 | 1 | | 2 | | | |
| 16 | 〃 | 6 | 11 | | | | | 善悪二王子経 | 仏教 | 106 | 108 | | | | |
| 17 | 〃 | 9 | | | | | | Mait / H Kolophon | 〃 | 50 | | | 2 | | |
| 18 | 〃 | | | 3 | | | | Manichaica I T 1α | マニ教 | 11 | | | | | |
| 19 | 〃 | | | | | | | T II D 173a, b, d | 〃 | 11 | 22 | 41 | | | |
| 20 | 〃 | 5 | 14 | 1 | | | | T II D 171 | 〃 | 39 | | | | | 1 |
| 21 | 〃 | 14 | | | | | | T II D 177 | 〃 | 11 | | | | | 5 |
| 22 | 〃 | 8 | | | | | | 同 II T M 419 | 〃 | 16 | | | | | 3 |
| 23 | 〃 | 20 | | | | | | T II D 169 | 〃 | 17 | | | | | |
| 24 | 〃 | 11 | | | | | | 同 III T II D 121 | 〃 | 2 | | | | | 2 |
| 25 | 〃 | 13 | | | | | | T M 423c | 〃 | 13 | | | | | |
| 26 | 〃 | 7 | | | | | | T II D 78a | 〃 | 21 | | | | | |
| 27 | 〃 | 6 | | | | | | マニ教寺院経営令規文書 | 〃 | 133 | 2 | | 3 | 7 | |
| 28 | 〃 | 13 | | | | | | M 112v | 〃 | 11 | | | | | 1 |
| 29 | 〃 | 24 | | | | | | Manuscrit 88 | 〃 | 31 | | 11 | | | |
| 30 | 〃 | 9 | | 1 | | | | | | | | | | | |

(64) Erdal 1984, p.267. ヤルカンド文書中，zは主に二点を付して表され，またẓに三点を付した例が一つある．

ことを表す要素であったことを示している．するともはや「加点」によってNと区別する必要は認められない．語末においても尻尾の長短によって両者の区別は明白である．(65) ではやはり加点はzとžの区別のために付されているのだろうか．表5を見ると確かにzは無点で，žは¨または二点によって表す傾向がうかがえる．しかし，加点がžを示す要素であると捉えることはできても無点がzのそれであるとは言い難い．なぜなら，かなりの率でzに点を付しているもの，例えばMOTH Nos.16, 18, 20, 36, DTH C, E, F, H, 善悪二王子経，Manichaica T II D 173 a, b, d, Manuscrit 88などの存在量は無視できる範囲をはるかに超えているからである．

これらの結果から，ウイグル文字におけるZへの加点とその機能は，Sims-Williams氏が指摘したソグド文字における状況と同じであると結論づけられよう．すなわち，žにのみ加点するという旧説は誤りであるということになる．žにのみ加点する資料と，NとZの区別のためにz及びžに加点する資料間にきわだった性質の違いは見いだされないので，当面，文字Zへの加点を文書の時代判定の手がかりとすることはできそうにないのである．

### 第四節　t/d，s/z交替について

元来ウイグル文字においてはtとd，sとzは全くの別字である．ところが，tと発音されるべき箇所にdが，sと発音されるべき箇所にzが書かれていたり，またそれらの逆が行われている文書が確かに存在する．これらの交替(歯音交替＝Dentalkonfusion；以下DK)は非常に恣意的であり，そこに一定の法則は見いだされない．なぜこのような現象が起こったのかは未解明であるが，その開始時期についてはモンゴル時代ではないかとする説が流布していた．これはモンゴル文字でのDKの定着化，つまり現代に至ってはウイグル文字でのTがモンゴル文字では語頭のt, dに，同Dが語中・末のt, dに用いられているということから受け入れられ易い考え方であり，文書の時代判定をする際の「モンゴ

(65) Sims-Williams 1975, p.132. このSims-Williams氏の指摘はソグド文字に関してのものであるが，この度の調査より同様のことはウイグル文字においても言えると思われる．

ル時代の指標」として主にZieme, Doerfer氏によって支持・利用されてきた.[66]

しかしそれに対してDKはもっと早くに起こっていたという指摘も存在する. 1969年Hamilton氏はこの現象が見られるのは10世紀以降であろうと述べ,[67] また1979年のErdal氏による古トルコ語文献の年代的分類研究において, DKの頻出は「第三段階」の指標とされている.[68] Erdal氏は古トルコ語文献を四つの段階に分類し, 各々の具体的年代こそ示さなかったものの11世紀の半ばは既に「第四段階」に入ると述べていることから, Hamilton氏と同見解であることが認められよう.[69] さらに1994年には森安氏が『ウイグル文契約文書集成』に収められた10〜14世紀の文書を調査した結果, DKが半楷書体から草書体までいずれの書体にも無差別に現れることをもとに, Hamilton・Erdal両氏の見解を承認している.[70]

以上のような論争の経過をたどっていくと, 近年はDK出現を10世紀頃とみる側の活発さが目立つ.[71] しかし, そのような中で1991・93年Doerfer氏はこの現象がモンゴル時代以前には見られないことを非常に強く主張し, 「この現象を持つ写本で元代以前に年代比定されるものはない」と述べた.[72] では, なぜDoerfer氏はここまで強固に「モンゴル時代説」を唱えるのであろうか, その根拠を見る前に, まずこの論争の終着点を示しておきたい. それは, やはりDKはモンゴル時代以前にも確実に存在したということである. この度の調査により, 次表に挙げるDKの例が発見された. 確かに全体量からすればわずかではあるものの, DKの存在は10世紀, 場合によっては9世紀にまでさかのぼり得るのであり, 文書の時代判定においてモンゴル時代の指標とはできないのであ

---

(66) Zieme 1975a, p.332 ; Zieme 1977, p.156 ; Doerfer 1991, pp.175-177 ; Doerfer 1993, pp.27-29.

(67) Hamilton 1969, p.27.

(68) Erdal 1979, p.156.

(69) Erdal 1979, p.158.

(70) 森安 1994, pp.68,81.

(71) 先にZieme氏はこの問題について「モンゴル時代説」をとっていると述べた. これは確かに氏の70年代の論文からははっきりと読み取ることができる. しかし同氏の91年の論文には「11世紀ごろから」と述べられており, もしかするとその見解は変更されたのかもしれない (Zieme 1991, p.348).

(72) Doerfer 1991, pp.175-177 ; Doerfer 1993, pp.27-29.

る．また，これら初期 DK の具体例は，これまで恣意的とされてきたことに対して MOTH No.30 のような同一文書中で一貫して d- を t- と表記しているような例をどうとらえるか，さらに t/d，s/z の各交替現象はその発生時期・原因等ひとくくりに扱ってよいものかといった新たな問題を示しているとも言えよう．

表 6

| 資　料 | 種類 | 単語 | 文書中の表記 | 意味 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| MOTH　No. 3 | 仏教 | čintämäni (i) (a) (a) (i) | CYND'MWNY | 如意宝珠 | 4, 26行目 skr. cintā-maṇi |
| 21 | 世俗 | amtï | 'MDY | 今 | 9行目 |
| 30 | 世俗 | ïd- | 'YT- | 送る | 同文書中では一貫して ït-；8例 |
| ロンドン本天地八陽神呪経 | 〃 | darni | T'RNY | 陀羅尼 | 352行目 skr. dhāraṇī |
| 〃 | 〃 | atqanγu | ''DX'NXW | (この世への)愛着 | 462行目 |
| 善悪二王子経 | 〃 | tusu | TWZW | 利益 | XXI－1 行目 |

それでは先程の問題に戻りたい．なぜ Doerfer 氏はあれほど強硬に「DK モンゴル時代説」を主張するのか，その根拠は何であるかという問題である．それはごく簡潔に要約すると次のようになる．「例えばトルコ語は語頭に d- を持たず，モンゴル語は語頭に d- を持つ．従ってトルコ語では常に(若干の外来語を除いて)語頭には t- が立ち，この文字がモンゴル語によってその d- のために引き継がれ，ここに不確実さが生じた．語末の d，語中・末の z にも見られるこのような両言語の持つ音の不一致から，文字システムの変化は説明される」．またこの他に「トルコ語の z のための文字は，z はモンゴル語には存在しない音であるが，大変古いモンゴル語テキストでは時々 -s に対して使われている（中略）トルコ語の語末の -z はどっちみち有声ではなく，あまり -s と区別がないことに注意すべきである」と述べられている．そして最終的には「元代におけるトルコ・モンゴル両言語共同体文化の密接な結び付き」により，この混交がトルコ語にも影響したと結論づけている．(73)

言語学の素養のない私には，以上の説明の前半部分の真偽は判断し得ない．

(73) 前註 (72) 参照．

しかし一つだけ言えることは，この前半部分は実はモンゴル語でのDK発生の根拠を説明しているのであって，肝心のトルコ語でDKが見られる根拠は後半部分の「モンゴル語の影響」という部分でしかないことである．従ってたとえ前半部分の説明が言語学的に正当であったとしても，それが必ずしもトルコ語に影響を与えたと断定できないところにこの論の弱点がある．従って，やはり私は今回の調査結果を書き手のミスや単なる偶然とは考えず，DKは9～10世紀から既に存在したと断定したい．DKを文書の時代判定の手がかりとして利用する場合は，その有無ではなく出現頻度を問題にすべきであろう．この度の調査でこれだけの例しか見つからなかったということは逆に，DKはやはり時代とともに増加していったことを示すものである．もはやDoerfer氏のようにDKの存在そのものを相対的に新しい指標とすることはできなくなったものの，Erdal氏のように頻出をそうみなすことはまだ十分に可能なのである．

## 第二章　調査結果の総合的整理とその試用

第一章では個々の字形について，それが9～11世紀という範囲内で一定の特徴を示すことにより，文書の時代判定への手がかりとして利用し得るかどうかを見てきた．ところがその結果，文書の種類にとらわれず「古い時代」の指標として有効であるとみなし得るのはs/šの別字としての区別のみであった．しかしながら全調査結果を繋ぎ合わせ，別の立場から眺め直してみる時，そこにはこの時代の模範的正字法がどのようなものであったか，そしてそれが最も忠実に守られている文書群にはどのような共通性，意味があるのかといったことが見えてくるのである．本章では全調査結果を総合することにより当時の字形の一般的様相を探るとともに，それを用いて，同様の調査を行ったにも関わらず私との結論の相違を生む最大の原因となったDoerfer氏の，MOTH中の多くは元代のものとする見解について検討を加えてみたいと思う．

## 第一節 種類別集計の示すもの

ここではまず第一章での各調査結果を一覧表(表7)としてまとめることから始め，以下に考察を進める基本資料としたい．各項目の内容は次のようなものである．

①s/šの別字としての区別：区別のある場合には○，あったりなかったり混乱している場合には△，全く区別のない場合には×を記す．

②q音に対する二点付加率：但し一点付きのqは非常に少ないことから，ほとんどのものについてはまた「100(%)−②(%)」を無点qの割合とみなすことができよう．

③q/γの尻尾の長さによる区別：凡例は①に同じ．但し，必ずしもqの尻尾を長くγのそれを短く書いていなくとも，その文書内において相対的にqの尻尾がγより長くなるように注意が払われている場合は○と判定した．

④z音への加点率：隣に＊のついたものは同文書中にẓ音をも持ち，かつそちらに加点がなされていることを示す．

⑤DKの有無：あれば○，無ければ×を充てる．

また，全てについて「−」は例無し，もしくは例不足により判定不可能なことを意味する．MOTH中に見える☆印については次節に説明することとし，今は無視してよい．

さて，このように全結果を総合し，まず全資料に渡って各項目間の相関関係に注目してみた．同じX字に関わる②と③の間に特別な補完関係が見られないことは既に前章第二節の(二)で述べた通りである．(74) また，①と③の間には若干の連動関係があるように見えるが，これはこれら両区別が同じ頃に同じ位の速さで軽んじられていったことを示すものであろう．しかし，これ以外に各項目間にさしたる関係は見いだせず，全くバラバラという印象を受ける．

ところが，もし文書を種類ごとに分けて考えるなら，状況は一変してくる．Manichaica中の諸文書に代表されるように，マニ教関係文書ではかなりの割合で全項目が連動しており，そしてそれは全ての区別をしっかり守り，極力あい

(74) 本稿，p.20.

表7（その1）

| 資　　料 | | 種類 | ① | ②(%) | ③ | ④(%) | ⑤ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| MOTH | No. 1 | 仏教 | × | 31.9 | △ | 2.5 * | × |
| | No. 2 | 〃 | △ | 80.8 | × | 0.0 | × |
| | No. 3 ☆ | 〃 | × | 10.4 | × | 9.1 * | ○ |
| | No. 4 ☆ | 〃 | — | 54.5 | × | 0.0 | × |
| | No. 5 | マニ教 | ○ | 39.2 | △ | 0.0 | × |
| | No. 6 | 〃 | ○ | 0.0 | ○ | 0.0 | × |
| | No. 7 | 〃 | ○ | 50.0 | ○ | 0.0 | × |
| | No. 8 | 〃 | ○ | 5.9 | ○ | 0.0 | × |
| | No. 9 | 〃 | ○ | 0.0 | — | 0.0 | × |
| | No. 10 | 〃 | × | 50.0 | — | 0.0 | × |
| | No. 11 | 世俗 | — | 14.3 | × | 0.0 | × |
| | No. 12 | 〃 | — | 0.0 | × | 0.0 | × |
| | No. 13 | 〃 | ○ | 42.9 | ○ | 0.0 | × |
| | No. 14 ☆ | 〃 | ○ | 6.1 | △ | 5.0 | × |
| | No. 15 ☆ | 〃 | △ | 15.6 | △ | 0.0 | × |
| | No. 16 | 〃 | ○ | 0.0 | × | 64.7 | × |
| | No. 17 ☆ | 〃 | — | 0.0 | × | 0.0 | × |
| | No. 18 ☆ | 〃 | × | 50.0 | — | 100.0 | × |
| | No. 19 | 〃 | ○ | 0.0 | × | — | × |
| | No. 20 | 〃 | × | 33.3 | × | 75.0 | × |
| | No. 21 ☆ | 〃 | × | 0.0 | × | 0.0 | ○ |
| | No. 22 | 〃 | × | 0.0 | × | 0.0 | × |
| | No. 23 | 〃 | × | 0.0 | △ | 0.0 | × |
| | No. 24 | 〃 | ○ | 20.0 | △ | 0.0 | × |
| | No. 25 ☆ | 〃 | ○ | 7.7 | ○ | 0.0 | × |
| | No. 26 ☆ | 〃 | ○ | 0.0 | × | 0.0 | × |
| | No. 27 ☆ | 〃 | ○ | 0.0 | ○ | 0.0 | × |
| | No. 28 | 〃 | ○ | 8.7 | △ | 0.0 | × |
| | No. 29 ☆ | 〃 | × | 2.9 | △ | 0.0 | × |
| | No. 30 ☆ | 〃 | × | 0.0 | × | 10.0 | ○ |
| | No. 31 | 〃 | ○ | 0.0 | ○ | 0.0 | × |
| | No. 32 | 〃 | — | 0.0 | — | 0.0 | × |
| | No. 33 ☆ | 〃 | × | 0.0 | — | — | × |
| | No. 34 ☆ | 〃 | × | 3.0 | △ | 0.0 | × |
| | No. 35 ☆ | 〃 | × | 0.0 | × | 0.0 | × |
| | No. 36 | 〃 | × | 0.0 | — | 100.0 | × |
| ロンドン本天地八陽神呪経 | | 仏教 | ○ | 88.2 | ○ | 0.0 * | ○ |
| DTH | A | 世俗 | × | 5.6 | — | 0.0 | × |

表7（その2）

| 資　　料 | 種類 | ① | ②(%) | ③ | ④(%) | ⑤ |
|---|---|---|---|---|---|---|
| DTH　B | 世俗 | ○ | − | − | − | × |
| C | 仏教 | − | − | − | 100.0 | × |
| D | 世俗 | − | − | − | − | × |
| E | 〃 | × | 0.0 | − | 35.7 | × |
| F | 〃 | △ | 50.0 | − | 92.3 | × |
| G | 〃 | △ | 7.7 | × | 0.0 | × |
| H | 〃 | × | 0.0 | − | 66.6 | × |
| 善悪二王子経 | 仏教 | ○ | 50.2 | △ | 50.5 | ○ |
| Mait / H　Kolophon | 〃 | △ | 67.4 | ○ | 0.0 | × |
| Manichaica I　T I α | マニ教 | △ | 100.0 | ○ | 0.0 | × |
| T II D 173 a, b, d | 〃 | ○ | 100.0 | ○ | 85.1 | × |
| T II D 171 | 〃 | △ | 98.0 | × | 0.0 * | × |
| T II D 177 | 〃 | ○ | 97.5 | ○ | 0.0 * | × |
| 同 II　T M 419 | 〃 | ○ | 92.3 | ○ | 0.0 * | × |
| T II D 169 | 〃 | ○ | 100.0 | × | 0.0 | × |
| 同 III　T II D 121 | 〃 | ○ | 77.8 | − | 0.0 * | × |
| T M 423c | 〃 | ○ | 84.6 | × | 0.0 | × |
| T II D 78a | 〃 | × | 0.0 | ○ | 0.0 | × |
| マニ教寺院経営令規文書 | 〃 | ○ | 0.0 | ○ | 1.5 * | × |
| M 112v | 〃 | × | 0.0 | ○ | 0.0 * | × |
| Manuscrit　88 | 〃 | × | 57.6 | ○ | 26.2 | × |

まいさを無くそうとする方向への動きである．そこで，第一章でも度々言及した，文書の「種類」がその文書内での各区別の有無にどのように関わっているのかをより具体的に見るために，①から⑤までの結果について次のような集計を行ってみた．それは全項目について，いかにあいまいさを無くす努力が払われているかを得点化してみようとするものである．

その方法は，まず，①・③については○を1，△を0，×を−1点と換算し，次に②はXに点を付す場合はqを表すためであるという第一章での結果を踏まえて[75]，qへの二点付加率が51%以上のものを1，50%のものを0，49%以下のものを−1点とした．④はẓ音には加点がなされる傾向が強いこと[76]からz

(75) 本稿，p.14.

は無点である方がはっきりすると評価し，②とは逆にzへの加点率49%以下を1，50%を0，51%以上を－1点とした．最後に⑤は，混同の生じている○を－1点とし，×は1点とする．そして各文書ごとに①から⑤までの点数を加算し，合計得点による分布を示したところ以下表8のようになった．

表8

| 得 点 | マニ教 | 仏教 | 世俗 |
|---|---|---|---|
| グループ1<br>（4点以上） | ＊＊＊<br>＊＊ | ＊ | |
| グループ2<br>（2，3点） | ＊＊＊＊＊<br>＊＊＊＊＊ | ＊＊<br>＊ | ＊＊＊＊<br>＊＊＊＊ |
| グループ3<br>（0，1点） | ＊＊<br>＊ | ＊＊<br>＊ | ＊＊＊＊＊＊＊＊<br>＊＊＊＊＊＊＊ |
| グループ4<br>（－1，－2点） | | | ＊＊＊＊<br>＊＊＊ |
| グループ5<br>（－3点以下） | | ＊ | ＊＊<br>＊ |

［＊一つは文書一件を表す］

ここから，得点が0，1以上のグループにしか現れないマニ教関係文書と，逆に0，1以下に分布の偏りを示す世俗文書との間には歴然たる差が存在し，そしてその中間的位置に仏教関係文書があるとみなすことに無理はないであろう．つまりこの分布図は，9～11世紀の間で最も厳格に各区別を守り「一音一字形主義」にこだわっていたのがマニ教文献であったこと，そして仏教文献，世俗文書へと次第に一つの字形で複数の音を表すあいまいさが増長されていったことを示しているのである．さらに，①から③，そして⑤については，あいまいさの生じていないものの方が相対的に古いと考えられることから(77)，このマニ教文献の非常な几帳面さはまた同時に，ウイグル文字史におけるこの種の文書の成立時期の早さを示しているとも言えよう．全ての項目でのプラス評価により5点という高得点を得たManichaica中のT.IID.177及びT.M.419などは，ウイグル文字でもこれ程紛らわしさをなくすことができたという一つの可能性を示

(76) 本稿，p.25.

(77) 本稿第一章での，それぞれの字形についての節を参照のこと．

すものであり，以後徐々に崩れていくウイグル文字正字法の原点をここに見ることができるのである．

そしてこのような結論に至った今思い起こされるのが，トルコ仏教及び古トルコ語仏典の起源を論じた1989年の森安氏の論文である．それは，欧州トルコ学界の主流を占めるトルコ仏教・仏典の始源をソグド仏教とみなす見解“sogdische Hypothese”に対して様々な視点からその矛盾を明らかにし，新たにトルコ仏教成立に中心的役割を果たしたのはトカラ仏教であるとする“tocharische Hypothese”を提唱するものであった．(78) そしてその過程において氏は，“sogdische Hypothese”の根拠とされていたñ/n言語による初期トルコ語仏典の特徴の多くが実はマニ教トルコ語文献でしばしば見られるものであったこと，かつñ/n言語はマニ教文献の方に一般的であることに着目し，「トルコ族の間へソグド人が初めて組織的に伝えた宗教は仏教ではなくマニ教であるという立場を堅持す」れば，「先ずマニ教トルコ語並びにマニ教トルコ語文献が成立し，その圧倒的影響の下，仏教の長い伝統を持つ天山地方で仏教トルコ語並びに仏教トルコ語文献が形成されてきたとごく自然に考えられ」ると述べている．そしてまたこれによれば，“sogdische Hypothese”の一番の根拠であった初期トルコ語仏典中の借用語に見られるソグド語仲介型式の割合の高さや，それらの仏典の大半がトカラ語・漢語からの翻訳であるという事実を無理なく説明することができるのである．(79)

先に私が表8に基づいて出した結論は，この氏の見解を補強するものであろう．即ち，トルコ族の間にソグド人が最初にもたらした宗教がマニ教であったからこそ，同じソグド人から導入されたウイグル文字による文献中，マニ教文献の字形が最も初期的様相を示していると考えることは不自然ではない．ウイグル文字マニ教文献の成立が同仏教文献に先立つということは，氏が根拠とした様々な史料の他に「字形調査」という方法からも証明されるのである．

---

(78) 森安 1989a.

(79) 森安 1989a, pp.15-18.

## 第二節　MOTH に対する Doerfer 見解の再検討

従前度々言及してきたように，文書の時代判定の指標として字形に注目し，それを初めて実際に大規模かつ詳細な調査により確かめようとしたのは Doerfer 氏であった．その成果は1993年の著作中の一節に発表されているが，これは8～14世紀末に及ぶ大量の文書を対象とし，そして何より従来二次的にしか扱われてこなかった字形の問題を正面から捉え，徹底した調査を実施したという点で十分に評価されるべきものであろう．また，同氏が各文書の地域性に非常に注意を払っていることにも注目すべきである．(80) しかしそこにはまた同時に二つの欠点があった．一つは文書の種類を考慮せずに全てをひとくくりに扱ったこと，そしてもう一つは，各文書を氏自身の分類指標によって先に年代的に分類した後で字形調査を行ったことである．後者はつまり，その分類自体に誤りがあった場合は調査そのものに問題が無くとも，正しい結論には到達しないことを意味する．事実氏の時代判定は，あるものについては他の研究者のそれと一致しない．その代表がここに取り上げる MOTH の例である．

MOTH は，敦煌のいわゆる「蔵経洞」出土ウイグル文書の集成であり，従ってそこに収められた文書類は，その洞窟封鎖の年代から11世紀前半以前のものとみなされるのが普通であった．編者である Hamilton 氏もその立場からこの集成に『敦煌の９～10世紀ウイグル文書』(*Manuscrits ouïgours du IXe-Xe siécle de Touen-Houang*) との題名を冠したのである．(81) また，この集成出版前年の，敦煌出土ウイグル文書についての解説論文中において森安氏も，一口に敦煌出土とは言え実際には本来の「蔵経洞」出土文書と「蔵経洞」とは別の窟から将来されたモンゴル時代以降の文書とが存在し，実際に前者に後者が紛れ込んでいた例があることを明らかにしながらも，一応の検討の必要性を指摘した上で，それで疑わしい点が無ければ「蔵経洞」出土文書はやはり11世紀前半以前のものとみなされるべきであろうと述べている．(82)

---

(80) Doerfer 1993, pp.94-115.

(81) Hamilton 1986, introduction, p.XXII.

(82) 森安 1985a, pp.3-36.

ところが，Doerfer 氏はこれに真っ向から対立する意見を持つ．つまりこの「蔵経洞」封鎖の時期そのものを否定するのである．[83] 氏は1991年の論文において MOTH に言及し，そこに含まれた36件の文書について「7つのテキストは古く，14ははっきり決め難いがおそらく，いや確かに元代には由来しない．15のものは元代に由来する」と述べ，かつ「洞窟封鎖のテーゼが，Hamilton 氏の判断力を曇らせた」のだとしている．[84] そしてこの見解は氏の93年の著作においても引き続き繰り返され，氏が元代のものであるとする15件の全ての No. が具体的に挙げられたが，それは Nos.3, 4, 14, 15, 17, 18, 21, 25, 26, 27, 29, 30, 33, 34, 35 の15件であった．[85] しかし Doerfer 氏がこれらを元代のものとみなした根拠はその一件一件について細かく説明されてはいない．91年論文では，主として No.15 の abaγa「おじ」，21 の tuŋγaγ「布告」，14, 33, 34 の Sïŋqor「鷹」がモンゴル語からの借用語であるから，そして t / d，s / z の交替即ち DK を持つものは元代以前には有り得ないからという二つの理由が挙げられているが，[86] 93年の著作では30ある氏自身の年代的分類指標のうち元代以前と以後とを見分けるものとして今の二つを含めた10程が挙げられる一方，MOTH 中の文書に限っての具体的言及は無く，先に挙げた結論が巻末文献目録中に示されているのみである．[87] そしてその10程の指標の大半は，接尾辞の母音変化，借用語の問題といった言語学的領域に属すものであった．[88]

本節で私が試みるのは確かに，この MOTH に対する Doerfer 氏の見解の妥当性を吟味することであるが，それは氏の年代的分類指標そのものの妥当性を疑うことを意味するのではない．ただ，もし問題の15件の文書が元代のものであるなら，それらの字形は他の9～11世紀の文書中にあって，何らかの特殊性を

(83) この考えは Doerfer 氏のみならず，Erdal 氏によっても支持されている．cf. Erdal 1988, p.252.

(84) Doerfer 1991, p.175.

(85) Doerfer 1993, p.241.

(86) Doerfer 1991, pp.175-177.

(87) Doerfer 1993, p.241.

(88) Doerfer 1993, p.61.

示すはずである．私の試みはこのような，氏とは全く異なるパレオグラフィー的側面から，先の**表7**，8をもとにこれらの文書の時代性をもう一度考え直してみることである．

**表7**中 MOTH No. に☆印を付したものが，Doerfer 氏が元代のものとする文書である．仏教文献である Nos.3, 4 以外はすべて世俗文書であり，マニ教文献は含まれていない．まず，これら☆印の付いた文書群に共通した特徴が見られるかどうかに注目してみよう．しかし，①，③だけを取り上げても○から×まで様々あり，かつそれらの組み合わせが共通しているわけでもないように，そこに一定の傾向は見出せない．従ってこれら15件の文書を，字形の共通性を理由にしてはひとまとまりのものとして扱うことができないことが分かった．では次に他の文書の中での，これらの占める位置はどうであろうか．**表8**では，マニ教文献・仏教文献は合計得点0以上のグループに集中している．従って0を一つの境界とし，それ以上，即ちグループ1～3であればこの時代における一般的字形で書かれているとみなすことができ，それ以下のグループ4，5であれば字形という点にのみ注目した場合その文書は特殊な位置にあると言うことができよう．しかし，世俗文書に関しては同じように0を境とするのは適当ではない．明らかに，同じ時期であっても世俗文書にはグループ4（－2，－1点）のものはグループ2（2，3点）とほぼ同数存在し，決して特異な例とみなすことはできないからである．世俗文書の場合，これらを特殊と位置付けてよいものか疑問は残るが，強いて挙げるならやはり最低点層である－3点以下（グループ5）の文書であろう．

では問題の15件の文書はどのグループに属しているだろうか．それらを**表8**と同じ枠組の表に当てはめたのが以下の**表9**である．ここからまず仏教文献の No.4 と，世俗文書の Nos.21, 30 以外の11件は，字形の面から見た場合9～11世紀の文書群から逸脱した要素は無く，300年程も遅い元代に書かれたものであるとは考えられない．また，世俗文書のグループ5に属す文書2件（Nos.21, 30）は共に DK を持つことに気付く．DK の出現回数が増すことは確かに相対的に

表9

| | 仏教 | 世俗 |
|---|---|---|
| グループ1 | | |
| グループ2 | No. 4 | No. 14, 25, 27 |
| グループ3 | | No. 15, 17, 26, 29, 34 |
| グループ4 | | No. 18, 33, 35 |
| グループ5 | No. 3 | No. 21, 30 |

新しいものを示す指標となるが，第一章で見たように極少ない回数であれば9～11世紀に存在しても決しておかしくはない[(89)]ことから，今これら二つの文書からDKに対して減点された－1点を取り消すなら，このグループ5の2件の文書は共にグループ4に吸収され，当時の文書群から特に逸脱した存在とはならないのである．さらに，表8から分かるように世俗文書のグループ5には今の2件以外に，問題の15件に含まれず，かつDKを持たないことからグループ4に吸収される可能性すら無いもう一つの文書(No.20)があることに注意しなければならない．世俗文書に関して，もし字形の面から特異な存在を挙げるとすればそれはこのNo.20であり，Doerfer氏が指摘した各文書はそうはならないのである．

次に仏教文献について見てみよう．仏教文献でDoerfer氏の指摘の対象となったのは，Nos. 3, 4の二つであった．そしてまずNo.4はグループ2に属し，変わった点は見られない．従ってこれを9～11世紀のものとみなすことに何ら支障はないであろう．しかしNo.3が仏教文献中異色の存在であることは否定できない．これが直接Doerfer氏の指摘と結び付くのかどうかは今の私にははっきりさせ得ず，ただ，この文書もDKを持ちグループ4にまでは格上げされる可能性のあることが指摘できるのみである．

以上のように問題の15件の文書は，残り44件の中に置いて見た場合No.3以外は何ら変わった点を持たなかった．ここから私はやはり，Hamilton, 森安両氏の見解に従い，蔵経洞封鎖の時期が11世紀前半であったこと，そしてこのMOTHに収められた諸文書が当然それ以前の時代に書かれたものであるとみなしたい．また，これらの文書が全て楷書体もしくは森安氏の分類による「半楷書体」で書かれていることも，この結論への重要な根拠の一つとなろう[(90)]．これらの文

(89) 本稿，p.27，表6．

書中にはnへの加点，šへの加点は唯一の例を除いて全く無く[91]，そして中にはsとšの別字としての区別を保っているものさえあった．モンゴルの影響によりn, š両字への加点が始まったとするDoerfer氏自身が[92]，同時に全く加点を持たないこれら15件を元代のものとみなすことは，その当否は別にしても，自己矛盾に陥っていると言わざるを得ないのである．

## おわりに

9～11世紀に書かれた文字の形を一つひとつ調べてきた結果，「この時代の特徴」と呼べるようなはっきりした傾向を明らかにすることはできなかった．s/šの別字としての区別，そしてq/γの尻尾の長さによる区別があることは，文書の古さを言う際の一つのメルクマールにはなり得る．しかしそれ以外の字形や字形の組み合わせから，新たな時代判定指標を見つけ出すことはできなかった．むしろ，この度の調査により明らかになったのは，ウイグル文字誕生からまだそれ程の時間を経ていない9～11世紀においてさえ，既に正字法の不統一は相当に進んでいたということである．それ故この時期には各区別を守るか否かによって現れる字形の種類に幅があり，しかもそこにどの区別を守ってどれを守らないかといった組み合わせの違いが重なることで，多種多様な書き方をした文書が存在することになった．しかし，いわゆる後期的現象とされてきたn, šへの加点はやはり全く見られず，これらの習慣がまだ成立していなかったことは確かである．

さらに，一つの試みとしてこの時期の正字法の「揺れ」を点数化することにより，文書の種類による格差の存在を見いだすとともにマニ教文献が仏教文献に先立つことを確認し，また当時の文字の書かれ方としての一般的範囲を示すことにより，MOTH中の文書は11世紀前半以前のものであると結論づけた．これ

(90) 森安 1985a, p.16.

(91) この唯一の例が見られるのが，第一章第一節で述べたように今回の調査では例外地域にあたるホータン出身者の書いた文書であることは，留意すべきである．

(92) Doerfer 1993, p.113.

は，字形調査という純パレオグラフィー的手法であっても，歴史学への応用・貢献が十分可能なことを示す例であると考える．

しかしまた，解決を先送りせざるを得なかった問題も多い．中でも q, z への加点問題は今後，12世紀以降の各時代における加点状況を明らかにすることにより，新たな，より細かい時代判定指標発見の可能性を残していると言えよう．また，これらの文字への加点の数・起源に関する謎は，ソグド文字やマニ文字との関連をも含めて考えられる必要があると思われる．文書の時代判定をパレオグラフィー的側面からのみ行うことは到底不可能であるが，決して軽視することはできない．今後も新しい着眼点からの調査により判定指標を増やすことは可能であり，かつ必要なことであろう．

## 文献目録


Bang, W. ; Gabain, A. von ; Rachmati, G.R.

1934 Türkische Turfan-Texte, VI : Das buddhistische Sutra *Säkiz yükmäk*. *SPAW* 1934, pp.93-192, +1pl.

Cerensodnom, D. ; Taube, M.

1993 *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung*. (*BTT* 16).

Clauson, G.

1962 *Turkish and Mongolian Studies*. London.

1972 *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford.

Dankoff,R. ; Kelly, J.

1982 Mahmūd al-Kašγarī, *Compendium of the Turkic Dialects* (*Diwān Luγāt at-Turk*), Part 1. Harvard University Printing Office.

Doerfer, G.

1991 Bemerkungen zur chronologischen Klassifikation des Alteren Türkischen. *AOF* 18, pp.170-186.

1993 *Versuch einer linguistischen Datierungen älterer osttürkischer Texte*. Wiesbaden.

Erdal, M.

1979 The Chronological Classification of Old Turkish Texts. *CAJ* 23-3/4, pp.151-175.

1984 The Turkish Yarkand Documents. *BSOAS* 47, pp.260-301.

1988 Uigurica from Dunhuang. *BSOAS* 51-2, pp.251-257.

Gabain, A.von.

1938 Briefe der uigurischen Hüen-tsang-Biographie. *SDAW* XXIX, pp.371-415.

1948 Alttürkische Schrifttum. *SDAW* 1948-3, pp.3-24.

1974 *Alttürkische Grammatik*, 3rd ed. Wiesbaden.

Geng, Simin ; Klimkeit, H.-J. ; Einer, H ; Laut, J.P.

1988 *Das zusammentreffen mit Maitreya. Die ersten fünf Kapitel der Hami-Version der Maitrisimit*. 2vols. (*Asiatische Forschungen* 103), Wiesbaden.

Hamilton, J.

1969 Un acte ouïgour de vente de terrain provenant de Yar-khoto. *Turcica* 1, pp.26-52.

1971 *Le conte buddhique du Bon et Mauvais Prins en version ouïgoure.* (Mission Paul Pelliot III), Paris.

1986 *Manuscrits ouïgours du IXe-Xe siécle de Touen-Houang*, 2vols. Paris.

1990 Calendriers manichéens ouïgours de 988,989 et 1003. In : *Mélanges offerts Louis Bazan*, pp.7-23.

Hamilton, J. ; Niu, Ruji (牛　汝極)

1994 Deux inscription funéraires turques nestoriennes de la chine orientale. *JA* 1994-1, pp.147-164.

羽田　亨

1958「回鶻文字考」『羽田博士史学論文集 下巻 言語・宗教篇』京都，同朋舎，pp.1-38.

Hazai, G. ; Zieme, P.

1970 Zu einigen Fragen der Bearbeiten türkischer Sprachdenkmäler. *AO* 32, pp.125-140.

Laut, J.P.

1992 Errata et Corrigenda in alttürkischen Handschriften in Sogdo-uigurischer Schrift. *AOF* 19, pp.133-154.

Le Coq,A.von.

1912-1922 Türkische Manichaica aus Chotscho, I-III. *APAW* 1911-6, 61p., +4pls. ; 1919-3, 15p., +2pls. ; 1922-2, 49p., +3pls.

1919 Kurze Einführung in die uigurische Schriftkunde. In : *Mitteilungen des Seminars für orientalische Sprachen, Westasiatische Studien*, Berlin,pp.93-101.

松川　節

1995 (評) D. Cerensodnom & M. Taube, *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung*.『東洋史研究』54-1, pp.105-122.

森安　孝夫

1985a「ウイグル語文献」山口瑞鳳 (編)『講座敦煌　第六巻　敦煌胡語文献』東京，大東出版社，pp.1-98.

1985b「チベット文字で書かれたウイグル文仏教教理問答 (P.t.1292) の研究」『大阪大学文学部紀要』25, pp.1-85.

1988「ウイグル文書劄記 (その一)」『内陸アジア言語の研究』4, pp.51-76.

1989a「トルコ仏教の源流と古トルコ語仏典の出現」『史学雑誌』98-4, pp.1-35.

1989b「ウイグル文書劄記 (その二)」『内陸アジア言語の研究』5, pp.60-89.

1991a「ウイグル文書箚記（その三）」『内陸アジア言語の研究』7, pp.43-53.
1991b「ウイグル=マニ教史の研究」（『大阪大学文学部紀要』31/32）
1994 「ウイグル文書箚記（その四）」『内陸アジア言語の研究』9, pp.63-93.

小田　壽典
1988「ウイグル文八陽経写本の s / š 字形に関する覚書」『豊橋短期大学研究所紀要』5, pp.21-32.

Röhrborn, K.
1977 *Uigurisches Wörterbuch*, vol.1. Wiesbaden.
1983 Zu einem dialekt-differenzierenden Laut bergang im AlttUrkischen. *Materialia Turcica* 7/8, pp.295-305.

Sims-Williams, N.
1975 Notes on Sogdian Palaeography. *BSOAS* 38-1, pp.132-139.
1981a The Sogdian Sound-System and the Origins of the Uyghur Script. *JA* 269-1/2, pp.347-360.
1981b Remarks on the Sogdian letters γ and x. *BTT* 11, pp.194-198.

Sims-Williams, N Hamilton, J.
1990 *Documents turco-sogdiens du IXe-Xe siécle de Touen-Houang*. London.

庄垣内　正弘
1979「中村不折氏旧蔵ウイグル語文書断片の研究」『東洋学報』61-1/2, pp.01-029
1982「古代トルコ語 n 方言における ï / i の低母音化について」『神戸市外国語大学論叢』33-3, pp.39-57.

Tekin, Ş.
1980 Maitrisimit nom bitig. *BTT* 9.

Tezcan, S. ; Zieme, P.
1971 Uigurische Brieffragmente. In : L. Ligeti (ed), *Studia Turcica*, Budapest, pp.451-460.

梅村　坦
1983「大谷探検隊将来ウイグル銘文木片」護雅夫（編）『内陸アジア・西アジアの社会と文化』東京，山川出版社，pp.139-159.

山田　信夫
1975「ウイグル文書；資料と解説」『中央ユーラシア文化研究の課題と方法』大阪，アルタイ学研究連絡組織，pp.30-39.

山田　信夫；小田　壽典；梅村　坦；森安　孝夫
1987「ウイグル文契約文書の綜合的研究」『中央ユーラシア史の再構成』（昭和61年度科学研究費補助金綜合研究A研究成果報告書）pp.1-35.

吉田　豊
1994「ソグド文字で表記された漢字音」『東方学報』66, pp.380-271.

Zieme, P.
1969 *Untersuchen zur Schrift und Sprache der manichäisch-türkischen Turfan-texte.* Ungedruckte Dissertation der Sektion Asienwissenschaften der Humbolt-Universität. Berlin.

1975a Ein uigurischer Text über die Wirtschaft manichäischer Klöster im uigurischen Reich. In : *Researches in Altaic Languages*, pp.331-338.

1975b *Manichäisch-türkischer Texte. BTT* 5.

1977 Drei neue uigurische Skulavendokumente. *AOF* 5, pp.145-170.

1991 *Die Stabreimtexte der Uiguren von Turfan und Dunhuang*. Budapest.

## 略号表

*AO* *Acta Orientalia*, Copenhagen.

*AOF* *Altorientalische Forschungen*, Berlin.

*APAW* *Abhandlungen der Preussischen Akademie der Wissenschaften, Phil.-hist. Klasse*. Berlin.

*BSOAS* *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. London.

*BTT* *Berliner Turfantexte*. Berlin.

*CAJ* *Central Asiatic Journal*. Wiesbaden.

*JA* *Journal Asiatique*. Paris.

*SDAW* *Sitzungsberichte der Deutschen Akademie der Wissenschaften, Phil.-hist. Klasse*. Berlin.

## 付表　調査対象となった単語中でX字（q / γ / x）を含むもの一覧

**A**

ačïγ
ačïγlï
ačïnγčï
ačuq
ačrïq(γ)
adaqïn
adγïr
adïnčïγ
adrtlaγ
adruq
aγ
aγaz
aγazlanmïš
aγduq
aγïčï
aγïl
aγïz
aγlïq
aγnayu
aγïrlaγuluq
aγruq
aγu
aγusï
aγzïm
alγalï
alγïl
alγu
alqa
alqatmïš
alqïγ
alqïnčsuz
alqïš
alqu
alquγun
alqunï
alyuq
amraq
anglaγ
antaγ
anttaγ
apaγa
aqïtar
aqlayur
araqï
arγu
arïγ(q)
arqasïnya
arqïš
artamaγayarqïn
artatmaγay
artuq
arxant
asar
asγï
asïq(γ)
ašlaγarï
ašnuqï
ašnuraq
asqa
atγay
atlïγtg
axrwznaγ

ayadaqï
ayaγlïγ
ayaq
ayïγ
ayγučï
azïγ
azïq
azqïna

**B**

baγ
baγï
balaq
balïq
balïqčï
barduqïnta
barγay
barγïl
barïγ
barmaγay
barq
baštïnqï
bataγ
baxsï
bïšïγ
boduγ
boγuzča
bolγay
borluq
bozaγu
bozluγ
buγday
bulγanyuq
bulγay
bulγučan
bulmaqïmz
buqasï
burčaq
burx(q)an
buyanaγ
buyruq
buzaγu

**C**

čanaq
čaxšapat
čïγar
čïγarï
čïγay
čïŋratγu
čïqan
čoγ
čoγluγ
čoqar
čubuqan

**D**

daqï

**E**

enmaq
eštürüγli

**I**

ïdmaq
ïduq
ïγ
ïγač
ïγladïm
ïγlastï
ïγlayu
ilïγma
ïnaγ(q)
ïraq
ïšïγ
ïšuγma
ïšxaq

**K**

kädtuγmïs
kuianux

**L**

laγzïn
lawxan
lenxua
-lïγ
lïγžïr
-luγ

**M**

manyaq
maxa(q)
maxakäšip
maxarït
maxistak
monču q
muiγaq
muntaγ
muntaqïtï

**N**

naxïd
nïγošakaγ
nïrβanqa
nomqu

**O**

oduq
oγlï
oγlum
oγšaγ
oγšayur
oγšumïn
oγul
oγurïnta
olγurtï
olmaq
oq
oqï
oqïγučï
oqïyu
ornaγu
ortuq
orunluq
otruq
oxšayur
ozγ(q)ur
ozγurγay

**P**

pdw'xtg
pwnyxny

## Q

-qa
qač
qača
qačan
qačuγ
qadaš
qadγu
qadγur
qadï
qadïr
qadran
qaγ
qaγun
qal
qalaŋa
qalïn
qalïr
qam
qamaγ(q)
qamaγan
qamal
qamïlu
qamïš
qamčïu
qamuγun
q(x)an
qanaγ
qanïn
qanïncu
qanït
qaŋ
qaŋïm
qanqïm
qantur
qap
qapaγ
qaplan
qapïγčï
qaqïp
qar
qarγanurlar
qara
qaralaγ
qarï
qars
qasγuq
qašaŋ
qaši
qat
qata
qataγlan
qataqlïγ
qatun
qaturzun
qaβïš
qawdï
qay
qayu
qazčï
qazγanč
qazγanmaq
qazγansar
qïdïγ
qïl
qïlïγmalar
qïlïnčïγ
qïlï
qïlïnu
qïlïqta
qïlur
qïrqïn
qïsγa
qïšïŋ
qïyn
qïβtu
qïyïp
qïz
qïzγut
qïzïγ
qïzïl
qočluγ
qočo
qodï
qodur
qoduru
qol
qolγučï
qolïn
qolmïš
qoltγučï
qolu
qolulayur
qolur
qom
qonγusï
qonmaγï
qonaq
qonsa
qop
qopuz
qorqïnčïγ
qorqup
qoβ
qoβγasïn
qoβqasï
qoβradï
qoβraγ
qoy
qoyn
quanpu
quanβe
quba
qučuštï
quduγ
qul
qulčor
qulluqï
qulqaqïntaqï
qulunčaq
qulut
qumï
qunču
qunčuy
quŋqayu
qurč
qurï
qurtγar
quš
quščï
qušuγ
qut
qutadmïš
qutadmaq
qutarγa
qutaymïš
qutlï
qutluγ
qutsï
quβranu
quyanuγ
quypïn

quzγun

**R**

rïγ

**S**

sačγuča
sačlïγ
saγ(q)
salqïm
saqanur
saqïn
saqïnu
saqïnč
saqlanmadïn
sarïγ
satïγ(q)
saβaγ
sïγït
sïγnuγ
sïŋluγ
sïŋqor
sïŋqur
sïqtadï
sïqtayu
sïyuqïn
soγančïγ
soqušur
suγdu
suq
suqar
suβsušuγ

**Š**

šaγlï
šaxan
šïγ(q)
šmnuγ

**T**

taγ
taγay
tamγa
tamqa
tamuluγ
taŋquš
tanïγmalar
tanuq
tapaγïn
tapunuγ
taq
taqï
taqïγu
taqlïγ
taγaqčï
tarïγ
tarïmaqda
tarq(x)an
tarqaraŋ
tasγaru
tašqar
tataγlïγ
taβγač
taβïšγan
taβraq
tïnlïq(γ)
toγa
toγan
toγdï
toγmaqï
toγzun
tolïlïγ
tonqï
tonluγ
topulγaq
toqïn
toqïyur
toquz
toquzunč
torqu
toruγ
totoq
tsuγdu
tudaγmalar
tuγar
tuγluγ
tuγsar
tuγun
tuγurmaz
tuimaq
turγalï
turγurdï
turqar
turuγ
tutγan
tutuγu
tutuq
tuzaqčï

**U**

udγuruγlï
uduγïn
uγrayu
uγur
uluγ
umaγay
umuγ
uqčï
uqmaz
uqtï
uruγ
urunčaq
utmaq
utranγalï
uyγur
uzaγutqa
uzaqï

**β**

βarxar
βaxtï
βmax

**W**

waxšik

**X**

x(q)an
xarï
xatalur
xatlap
xayšïn
xïsγač
xïtay
xïz
xoanta

xormuzta
xoštï
xroštag
xroxan
xšnaki
xumar
x'nykt'

**Y**

yaγï
yaγlaqïr
yaγru
yaγuq
yalγap
yarlïγ
yaŋïqa
yaqšïčïï
yaqsïz
yapï'ï
yaraγay
yaraγlïγ
yarašlaγ
yaratïγlïγ
yarlïγ
yaruq
yašuq
yatγurup
yaxšï
yazuqluγ
yaβlaq
yazuq
yïγγu
yïγlayu
yïlqa
yïlqï
yïŋaq
yïpčaq
yïraq
yoγuru
yoŋaqcï
yoŋlaγ
yoq
yoqad
yoqaru
yoqlaγay
yoqqaru
yoruγ
yoxnan
yrutuγlï
yuluγ
yumšaqïn